

〈研究資料〉

明治前期人口統計史年表

附 幕府国別人口表

速 水 融

一 維新以前の人口調査

日本の人口統計は、すでに古代籍帳の作成時に、編纂されていた可能性がある。近時茨城県鹿ノ子C遺跡から発見された漆紙文書のなかに、延暦四年（七八五）の常陸国の人口集計を記した記録があり、戸籍に登録された人口が、少なくとも国府において合計されていたことが明らかとなった。⁽¹⁾ その結果はおそらく中央政府に伝達され、全国人口数が計算されていたものと思われる。

しかし、律令政権の行政能力が衰退し、戸籍編成も行われなくなると、中央・地方行政機関による人口調査は絶えてしまい、ついで成立した荘園制、そして鎌倉・室町・幕府のもとでは、人口調査は全く行われなかった。その必要もなく、実行しようにも出来なかったのである。したがって、日本の人口統計史上、八世紀以降、一六世紀末に至る間は、まさに

「暗黒時代」の名にふさわしい。

しかし、一六世紀末、排他的領主権を持った戦国大名が出現し、所領形成が進むと、領内の人口把握が可能となる条件が整った。また、戦国大名たちは、遠距離で行われる戦争や領内の水利灌漑・土木建築工事のため、大量の労働力を必要としたので、人口調査を行い、徴発可能な領民の数を測定する必要も生じた。かくして、不十分な形態ではあるが、家数改めや人別改めが実施され、人口調査が復活した。

これを引き継いだのが江戸時代に入ってから行われた幕府や各大名による家数改め、人別改めである。当初は人口調査として不完全であったものが、次第に整備され、たとえば『肥後国人畜改帳』にみるように精密な調査となつて、⁽²⁾ 後世の研究者に大きな利便を与えている。当時の天下人、あるいは領主にとって、領主権確立の第一は、検地を通じて、年貢徴収可能量を把握することであつたが、同時に、夫役徴収可

能量を把握する必要もあったわけで、この調査には、検地にたいして「検人」という名称を与えてもいいだろう。⁽³⁾

さらに、人口調査に関し、全く別個の必要が生じた。それはキリシタン宗門改めで、いうまでもなく幕府のつたキリスト教厳禁政策の産物である。幕府は、数次に亙りいわゆる「鎖国令」を出し、キリスト教の布教を厳しく禁止し、宣教師の入国、日本人の海外渡航を禁じてきたが、同時に寛永一五年（一六三八）から、直轄地において宗門改帳の作成を始めていた。⁽⁴⁾この調査の目的は、当初は人口調査ではなく、信仰調査であつたが、全住民を対象としたことから、いつでも人口調査となり得るものであつた。事実、江戸時代当時から宗門改の結果は人口数として報告されている。また、史料の名前も、「宗門人別改帳」というように、人別改と結合した表題を持つようになったところもある。

宗門改は、武士層を含め、普く行われた。ここでは、専ら庶民の場合に限るが、宗門改帳は、毎年一定の月に、居住する町や村ごとに作成され、各世帯構成員の属する寺院名、宗派、個々の名前、続柄、年齢等を記し、領主に提出された。しかし、江戸時代の常として、調査や書式は全国的に同一の規格を持っていたわけではない。ある藩では六年に一回しか実施されず、ある藩では幼少年齢の者を対象から外している。極端な場合には年齢の記載のないものもある。

また、重要なことは、宗門改帳作成の原理が複数あつたこ

とである。第一は、「本籍地主義」とでも称すべきもので、その地に生まれた者は、婚姻や養子縁組によって他所へ移動した場合を除き、死亡が確認されるまで記載され続けられた。実際には他所へ奉公に出て、そこに移り住んでしまつていても、非常に長寿まで生存し続けたことになつてしまう。しかし、一方で、その世帯に住む奉公人は記載しているので、今日の戸籍とも異なっている。この方式は、多くの大名領に見られる。

第二は、「現住地主義」とでもいうべきもので、他所へ移つた者は理由の如何を問わず記載から外し、実際に居住している者を記載している。中には、外へ出た者の動静まで追ひ、現在どこにいるか、まで記しているものもある。この方式は天領に多い。歴史人口学の研究者からすれば、この方式で作成された宗門改帳の方が遥かに有用である。

また、宗門改帳には、個々の世帯構成員に関する情報以外に、世帯の情報、例えば保有する土地の持高、家畜、家屋の状況、土地の賃借等に関し記録している場合もあり、これらの情報を豊富に備えた宗門改帳が、ある町や村について長期間に亘つて連続して利用可能な場合、われわれは、庶民生活の状態について、これ以上ない程の数量史料を持つことになる。

だいたい、近代国勢調査以前、あるいは近代国家成立以前に、個人個人の名前が書かれている住民記録 (nominative

list)が存在していること自身が世界でも稀で、しかもそれが、上述のように豊富な内容をもって毎年作成されている事例は、世界でも江戸時代の日本以外には、ごく限られているのである。もちろん、記載内容には制約があり、それらを無前提的に信頼してしまうことは出来ないし、残存の程度は決して高くはないが、これを組織的に利用し、明らかにされる庶民の生活誌は、歴史人口学の分野であれ、家族社会学の分野であれ、他では得られない高い評価を与えられている。

ところで、この調査は、人口統計としてすでに江戸時代から利用されていた。それは、享保六年（二七二）に始まる江戸幕府の国別全国人口調査で、將軍吉宗による享保改革の一環をなすものである。その意図が奈辺にあつたのか推測するしかないが、吉宗は、全国大名に命じて諸国物産調査も行っており、調査を通じて日本の国勢を知ろうという強い願望を持っていたことは事実である。

幕府の人口調査は、弘化三年（一八四六）まで続けられたことは確実で、その後、藩によつては幕府に報告した形跡があるが、幕末諸事多端の折、日本全体にわたる国別集計はなされなかった可能性が高い。したがって、現時点では、弘化三年の調査結果が判明する江戸時代最後のものとなる。

幕府の国別人口調査には、人口統計としては不完全なところが多い。江戸時代は、いかにその中に近代が準備されていたと、前近代社会であり身分制社会であった。支配階級で

ある武士と、被支配階級である一般庶民とを、足して合計人口を求めることは、少なくとも建前の上では出来なかった。したがって、幕府の調査には武士人口は含まれていない。ところが、この武士人口を定義しようとすると厄介で、ごく下層の武士、足軽や中間は、身分の上で庶民とほとんど連続的であり、どちらにも入れることが出来る。いずれにしても、幕府や各藩の武士数は、一種の軍事機密であり、ごく一部の例外を除いて明らかにされていない。

加えて、この調査は、幕府が代官や諸藩に命じて、それまで行ってきたそれぞれの方法で人口を数えて報告せよ、というものであったから、金沢藩のように一五歳以下の人口は含まれていなかったり、和歌山藩のように八歳未満の人口はカウントされていない、といった幼少年齢者の記載が不十分な場合が多く見られる。また、大隅、薩摩といった鹿児島藩領の人口はどうみても少なめで、明治初年の人口数との間にギャップがあり、過少報告がされていた。対馬藩の人口も同様である。問題は、こういった不完全な——多くは過少な——報告が、全国でどのようにされていたのかについて、組織的には何も分かっていない、ということである。

しかし、幕府の国別人口調査も貴重なもので、世界的に見て、一八世紀の初めから、一国の人口を、構成する地域ごとにとらえようとした例は他にない。利用の方法によつては、地域ごとの趨勢を見たり、比較したりすることは十分に可能

である。本論文の末尾に、今まで明らかにされている調査結果を一括して掲載する⁽⁵⁾。

二 維新政府の成立と戸籍編成

今まで、あまり云われて来なかったことだが、明治政府は成立当初から、異常と思われるほど強く諸統計の編纂を進めた。物産統計、貿易統計、教育統計等、人口統計以外にも多様な統計を編纂している。明治九年（一八七六）には「表記学社」（後のスタチスチック社）が出来、また、大蔵省統計寮から『統計雑誌』が発刊されるようになった。民間でも、明治一三年には『統計集誌』の刊行が始まっている。英語の statistics の訳語をどうするか議論があり、これを政表とし、demography は民勢学となったが、最終的には、政表は「統計」、民勢学は「人口」といわれるようになった。いずれにしても、新しい国家を出発させるに際して、全国の状況を、数字で掴んでおこうとする意図が伝わってくる。

このように、明治前期は、一種の「統計熱」とでも称すべき時代だった。数値によって状態を知ろうとする意図は、実証的追究の方法と通じるものがあるが、なぜ、当時の日本でこのような状況が生じたのかは、今後明らかにすべき課題である。

しかし、あらゆる統計に共通して云えることだが、統計数字を利用する前処理として、その書誌情報なるべく詳細に

求める必要がある。関連する法令、表頭や内容の規定、例外規定等はもちろん、統計表自身に付された正誤表に至るまで、情報を多く収集し、数字の性格や限界を明らかにして置くことは、数量史料を利用するものにとって、当然なすべき作業である。ところが、こと人口統計に関しては、書誌情報はこれ以上求められないほど準備されている。

第一は、一橋大学経済研究所、日本経済統計文献センターによって進められた業績、『明治前期日本経済統計解題書誌』で、細谷新治氏による「富国強兵篇」（全四冊、一九七四〜七八）には、明治一七年以前に編纂された人口諸統計の詳細な書誌情報が盛られている。

第二は、総理府統計局が設立百周年を記念して編纂した『総理府統計局百年史料集成』で、その「第二巻 上」（二九七六）が、本集成に含まれる国勢調査以前の人口統計について、関連法令、書式等を掲げる大冊である。

これらの血の滲むような基礎作業のお蔭で、われわれは、安心して人口統計を利用することができるのであり、書誌情報に関するかぎり筆者が付け加える何ものもない。ここに示す年表は、上記の両著作を基本とし、他の先行研究や、筆者の知見を加え、明治前期を中心に、人口調査に関連する事項を年代記として綴ったものである。年表の事項を一つ一つ解説する必要はないと思われるので、ここでは、特筆すべき事柄について、いくつか述べることにしたい。

長州藩における戸籍編成 年表が、維新政府の成立にはるか先立つて始まっていることには意味がある。それは、維新政府によって開始された戸籍が、その淵源をたどれば、長州藩の戸籍⁽⁶⁾に行き着くからである。このことは、夙に、多くの研究者によって云われてきた。現在、発見されている長州藩の戸籍の書式を見ると、明治初期の戸籍と類似していることは明らかで、宗門改帳の書式とは異なっている。また、長州藩においては、戸籍成立以後、宗門改帳が仕立られた形跡がないから、宗門改帳が明治戸籍の原型であったとするのは間違いで、両者の間には、むしろ断絶があつたとすべきであろう⁽⁷⁾。

長州藩では、すでに安永八年(一七七九)に改革があり、宗門改帳に替って戸籍が作成されるようになった、といわれている。さらに、『防長歴史用語辞典』によれば、戸口調査は元文四年(一七三九)に始められていたが、安永八年の改革で、戸籍仕法が制定され、毎年三月、庄屋年寄の手元で資料が作成された、とある。この資料については未見ではあるが、『辞典』の編者は、「書式は宗旨人別帳に似ている……二、三年ごとに書きかえた」としている⁽⁹⁾。しかし、この時の仕法は徹底せず、最終的には文政八年(一八二五)の改革を待たねばならなかった。新しい文政の改革では、戸籍は畔頭元で作成されることになり、戸籍帳の大きさ、紙質まで規定され、淡紙を台紙として、その上に半紙をはり、片面に一軒分を充て、「門役・宗旨・旦那寺・田畠畝石・牛馬・回船漁船・商売

体」のほか「戸主以下家族構成員の名前・出生・死亡・婚姻・別家等の異動」を記載するようになった⁽¹⁰⁾。そして、本人がいなくなった後も、その紙はそのままにして、新しい紙を上貼つて次の男女についての記載をする方式となった。宗門改帳が、原則として、毎年新しく作成されるのに対し、長州藩戸籍は、台帳を頑丈な紙で作つておいて、変化を半紙に書き、貼り重ねるという方式をとつたのである。

実際、今日に伝えられている戸籍は、記載内容、書式ともこの方式によつてゐる。そのことが、この戸籍を利用するに際し、宗門改帳の場合とは異なつて、特別の留意を必要とさせることになる。それは、半紙に書かれた部分がすべて残っているのか否かという問題で、経年の内に、脱落してしまつたものもあるに違いない。また、貼紙が固く糊付けされているため、下に書かれた内容が読めない、という障害も出てくるのである。

しかし、こういった利用上の問題点はあるにせよ、この長州藩戸籍は、明治維新が薩長連合の勢力によつて達成されたことから、その後の戸籍編成のプロトタイプとなり、非常に重要な意味を持つようになった。

このような戸籍編成は、いかなる原理をもつて進められたのであろうか。また、誰がその推進に携つたのだろうか。こういった問題の解明は、なお将来の課題であるが、判明する限りのことを挙げて置けば以下の通りである。まず、文政

明治前記人口統計・戸籍編成関係年表

年 代	事 項	形 出典・備考
文政8年(1825)	長州藩戸籍(とく)改正[明治壬申戸籍編成まで用いられる]	新見:(1959) p.111-113.
天保9年(1838)	大阪に適塾設立(1853~1856入門者数最高)	
弘化3年(1846)	ヒノエウマ年	
嘉永6年(1853) 6.3	ペリー浦賀に来航	
嘉永7年(1854) 3.3	日米和親条約(神奈川条約)	
安政2年(1855) 頃	杉亨二(1827-1917) バイエルの教育統計書を読む(人口調査の必要を知る)	杉:(1902) p.18, 22, 24.
安政3年(1856) 2.11	幕府番書調所開校 杉亨二(1827-1917) 留学の必要を説く	
安政5年(1858) 6.19	日米修好通商条約 コレラ流行	
安政6年(1859) 5.28	神奈川、函館開港	
万延元年(1860) 11.	万国政表[ヨング著] 翻訳出版(最初の統計書)	
文久元年(1861) 頃	杉亨二 オランダの統計書に接する	杉:(1902) p.18, 19, 24.
文久2年(1862) 5.	番書調所を洋書調所に改編	
9.	最初の海外留学生オランダに向かう	
文久3年(1863) 7.	薩英戦争	
8.	幕府洋書調所を開成所に改編	
元治元年(1864) 8.	4 国連合艦隊長州を攻撃	
慶応元年(1865) 12.28	西周、津田真道、オランダ留学より帰国	
慶応3年(1867) 10.15	大政奉還	
慶応4年(1868) 1.	戊辰戦争(明治2年5月終結)	
4.11	官軍江戸入城	
7.	旧徳川将軍家、静岡藩主となる	
明治元年(1868) 9.8	年号を明治に改元	
9.10	長州藩出身の横村正直、議政官史官試補として京都府に出仕	
10.13	維新政府東京を都と定める	
10.25	太政官布告によりキリシタン宗門改の続行を命ず	法令全書 明治元 p.336.
10.28	京都府戸籍仕法書 [京都府知事は横村正直]	r 福島:(1959) [法令集] p.8-22.
10.	会計局より関東諸県に村鑑帳提出を命ず	法令全書 明治元 p.327.
明治2年(1869) 2.23	会計局より関東諸県に村鑑帳提出を命ず(範囲不明)	法令全書 明治2 p.95.
5.	杉亨二「駿河沼津政表」を作成 [静岡奉行中台仲太郎との話し合い]	r 杉:(1902) 附録 p.1-15.
6.4	民部省より京都府において編成の戸籍書式を府県藩に通達	法令全書 明治2 p.202-203.
6.17	版籍奉還	
6.25	行政官より各藩に対し租税、戸口の調査を命ず	法令全書 明治2 p.238-239.
6.	杉亨二「駿河原政表」を作成	r 杉:(1902) 附録 p.15-25.
12.	戸籍諸規則案(民部省)	細谷:(1978) p.268-269.
品川県戸籍編成を命ず		r 石井:(1981) p.299-305.
明治3年(1870) 4.7	太政官より旧幕領に対し村鑑帳提出を命ず	法令全書 明治3 p.63-64.
5.	民部省より府県藩宛に戸籍編成の件を命ず	法令全書 明治3 p.86.
7.	杉亨二民部省出仕(〜9月帰国)	
7~9.	2年6月の通達に基づき和歌山県民政役所、戸籍帳作成	速水:(1955) p.69.
12.	2年6月の通達に基づき品川県、甲府県で戸籍作成	細谷:(1978) p.267.
	2年6月の通達に基づき徳島藩、高田藩で戸籍作成	細谷:(1978) p.287n.
明治4年(1871) 1.	杉亨二政表(スタチスブック)作成の必要を回答	
4.4	太政官布告により明治5年(壬申)2月1日を期して戸籍編成を命ず	r 新見:(1959) p.549-567.
10.3	大蔵省より宗門改帳廃止の件を通達	法令全書 明治4 p.560.
12.	杉亨二政府再出仕	
12.	太政官正院に政表課開設 「辛未政表」作成(明治5年4月刊)	rp 統計古書シリーズ第一輯(1961)
	2年6月の通達に基づき堺県、日光県で戸籍作成	細谷:(1978) p.267.
明治5年(1872) 2.1	壬申戸籍編成	
2.	文部省に医務課設置 杉亨二「壬申政表」作成(明治6年5月刊行)	細谷:(1978) p.276
12.3	改暦→明治6年1月1日となる	r 統計古書シリーズ第二輯(1962)
明治6年(1873) 1.10	徴兵令を定める	
2.21	キリシタン禁制の高札撤去	
7.28	地租改正条例布告	

		衛生局設置 杉亨二太政官政表課長 太政官布告により、私生児が認められるようになった 「日本全国戸口総計表」(明治 6.1.1調) [太政官] ms 文部省に衛生局設置			
明治7年 (1874)	2.	明六社発足 [会員は下級武士出身、幕府に雇われた蘭学者多し]			
	2.	『日本全国戸籍表』(明治5年調) [戸籍寮]			
	3. 24	太政官達により、戸籍寮において全国戸籍表編製を令達			細谷:(1978) p.315
	4.	明六雑誌発刊 (明治8年11月終刊)			
		「日本全国戸口総計表(国分)」(明治 7.1.1調) [太政官] ms	RP		
		「日本全国県分戸口総計表」(明治 7.1.1調) [太政官] ms			
明治8年 (1875)	3.	「明治6年府県物産表」 [勸業寮]			総理府統計局:(1976) p.73.
	6.	『日本全国戸籍表』(明治6年調) [戸籍寮]	RP		
	8. 12	「明治7年府県物産表」 [勸業寮]	RP		明治前期産業発達史資料別冊6.7. (1965)
	12. 2	太政官達により、戸籍寮において明治6年1月1日全国戸籍表編製を令達 「日本全国戸口総計表」 [太政官] ms 「明治8年全国男女年齢職業区別」 [太政官] ms 「明治8年共武政表」 [陸軍参謀本部]	RP		明治前期産業発達史資料 1 (1959)
明治9年 (1876)	2. 8	陸軍省より府県に共武政表作成に際しては人口等を取調べ提出を令達	RP		総理府統計局:(1976) p.73.
	12.	『日本全国戸籍表』(明治7年1月1日調) [内務省]	RP		
		表記学社結成 杉亨二社長となる 「戸籍局」[第1回年報]」(明治 7-8) 「明治9年1月1日調日本全国県分県分戸籍表」 ms 「明治9年全国男女年齢職業区別」 [太政官] ms			複製 青史社 (1976)
明治10年 (1877)		文部省の衛生行政、内務省に移管 西南戦争 (1.30~9.24)			総理府統計局:(1976) p.73-74.
	4.	『日本全国戸籍表』(明治8年1月1日調) [内務省]	RP		
	7. 20	内務省より使府県に明治7年1月1日現在の全国戸籍表編製を令達			
	10. 11	内務省より使府県に明治8年1月1日現在の全国戸籍表編製を令達			総理府統計局:(1976) p.74.
	12.	「衛生局第一報告」刊行 「戸籍局年報」(明治 9.7~10.6) 「衛生局第1第2報告」(明治 8.7~10.6) 内務省衛生局	RP		複製 原書房 (1991)
明治11年 (1878)	2.	「明治9年全国農産表」(勸農局)	RP		
	3.	『日本全国戸籍表』(明治9年1月1日調) [内務省]	RP		明治前期産業発達史資料別冊 1. (1964)
	7. 22	郡区町村編制成法			
	8. 24	内務省より使府県に明治9年1月1日現在の全国戸籍表編製を令達 表記学社→スタチスチック社に改名 「明治10年1月1日現在ト見做ス可キ人員及□年中生死員数一覧表」 ms 「明治11年1月1日現在ト見做ス可キ人員及□年中生死員数一覧表」 ms 「明治11年共武政表」 [参謀本部]	RP		総理府統計局:(1976) p.75.
明治12年 (1879)	2.	「明治10年全国農産表」(勸農局)	mf		
	12. 31	杉亨二甲斐国人口調査実施 [明治 15 年刊行]	RP		明治前期産業発達史資料別冊 2. (1965)
	12. 12	戸籍局より地方長官へ13年 1月 1日現在の戸籍表を所定表式により提出を命ず 「明治12年共武政表」 [参謀本部]			甲斐国現在人別調 (複製芳文閣 1968)
明治13年 (1880)	3.	『明治12年1月1日調日本全国郡区戸口表』			細谷:(1978) p.305.
	4.	「全国民事慣例類集」刊行 (司法省)	RP		複製 柳原書店 (1978)
	11.	「明治11年全国農産表」(勸農局)	RP		複製 青史社 (1976)
	12.	「東北諸港報告書」(開拓使)	RP		明治前期産業発達史資料別冊 3. (1965)
		統計集誌創刊 (東京統計協会) [現在の『統計』の前身] 「戸籍局第4回年報」(明治 11.7 ~ 12.6) 「明治13年共武政表」 [参謀本部]	RP		明治前期産業発達史資料 2. (1959)
明治14年 (1881)	3.	『明治13年1月1日調日本全国人口表』	RP		
	5.	「明治12年全国農産表」(勸農局)	RP		明治前期産業発達史資料別冊 4. (1965)
	10.	明治14年政変 (薩長藩閥政府成立、大隈重信政府を去る、松方財政) 「戸籍局第5回年報」(明治 12.7 ~ 13.6) 「衛生局第3次年報」(明治 10.7 ~ 11.6) 内務省衛生局	RP		
明治15年 (1882)	2.	『明治14年1月1日調日本全国人口表』	RP		
	2.	「西南諸港報告書」(開拓使)	RP		明治前期産業発達史資料 3. (1959)
	6.	「明治13年農産表 附牛馬頭数」(農務局) 「日本帝国統計年鑑(第1)」刊行開始 (統計局) [以後毎年] 「戸籍局第6回年報」(明治 13.7 ~ 14.6)	mf		明治前期産業発達史資料別冊 5. (1965)

		『衛生局第4次年報』(明治11.7~12.6)内務省衛生局	rp	
		明治13年都市生死婚姻統計表 内務省衛生局	RP	
明治16年(1883)	1.	『明治15年1月1日調日本全国戸口表』		
	春	杉亨二東京九段に統計学校設立(18年)		
	4.	『明治14年農産表』(農務局)	rp	細谷:(1978) p.305.
	11.7	内務省より戸籍表の表式改定を通達		
		『戸籍局第7回年報』(明治14.7~15.6)	rp	
		『衛生局第5次年報』(明治12.7~13.6)内務省衛生局	rp	
		『明治14年都市生死婚姻統計表』内務省衛生局		
		『明治16年徴発物件一覧表』[陸軍省]	rp	復刻 柳原書店(1979)
		この頃より府県統計書編纂始まる	mf	
明治17年(1884)	1.	『明治16年1月1日調日本全国戸口表』	RP	
	12.26	『興業意見』(前田正名編)許可		
		『戸籍局第8回年報』(明治15.7~16.6)		RP予定
		『都府名邑戸口表』(明治17.1.1調)	rp	
		『衛生局第6次年報』(明治13.7~14.6)内務省衛生局		
		『明治15年都市生死婚姻統計表』内務省衛生局	rp	
		『明治15年農産表』(農務局)	mf	
		『明治17年徴発物件一覧表』	RP	
明治18年(1885)	3.	『明治17年1月1日調日本全国戸口表』		
		『明治16年自1月至6月都市生死婚姻統計表』内務省衛生局		
		『衛生局第7次年報』(明治14.7~15.6)内務省衛生局	rp	
		『明治18年徴発物件一覧表』	mf	
		翌年にかけてコレラ流行		
明治19年(1886)	6.	『農商務統計表』【第1回】(農商務省総務局報告課)	rp	復刻 農業者誌研究会(1960)
	10.16	内務省令により戸籍取扱手続制定(現在の戸籍の前身)		総理府統計局:(1976) p.32-35.
		スタチスチック雑誌創刊		
		『明治18年1月1日調日本全国戸口表』	RP	
		『明治19年1月1日調日本全国民籍戸口表』(内務省総務局戸籍課)	RP	
		『明治19年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省総務局戸籍課)	RP	
		『明治19年徴発物件一覧表』	mf	
		『衛生局第8次年報』(明治15.7~16.6)内務省衛生局		
明治20年(1887)		『明治20年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省総務局戸籍課)	RP	
		『明治20年徴発物件一覧表』[陸軍省]	rp	復刻 柳原書店(1979)
		『衛生局第9次年報』(明治16.7~17.6)内務省衛生局		
明治21年(1888)	4.25	市制・町村制公布(実施は翌年より)		
		『明治21年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省総務局戸籍課)	RP	
		『明治21年徴発物件一覧表』	mf	
明治22年(1889)	2.11	大日本帝國憲法発布		
		『明治22年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省図書局戸籍課)	RP	
		戸籍脱漏者の就籍数激減		森田:(1944) p.372.
		民法人事編公布		
		『明治22年徴発物件一覧表』	mf	
明治23年(1890)	11.25	第1回通常議會招集		
		『明治23年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省庶務局戸籍課)	RP	
		『明治23年徴発物件一覧表』	mf	
明治24年(1891)		『明治24年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省庶務局戸籍課)	RP	
		『明治24年徴発物件一覧表』	mf	
		『衛生局年報』(明治17.7~20.12)内務省衛生局		
明治25年(1892)		スタチスチック雑誌→統計学雑誌に改名		
		『明治25年12月31日調日本帝國民籍戸口表』	RP	
明治26年(1893)		『明治26年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省警保局戸籍課)	RP	
	2.	『衛生局年報11』(明治21.1~22.12)内務省衛生局		
		『衛生局年報12』(明治23.1~23.12)内務省衛生局		
明治27年(1894)	8.1	日清戦争勃発		
		『明治27年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省警保局戸籍課)	RP	
明治28年(1895)	2.	『衛生局年報』(明治25.1~25.12)内務省衛生局		
	4.17	日清講和条約締結		
	5.10	遼東半島還付		
	9.21	万国統計協会より、1900年に各国一斉に国勢調査を実施すべき旨悠過		総理府統計局:(1976) p.201.
		『明治28年12月31日調日本帝國民籍戸口表』(内務省警保局戸籍課)	RP	

明治29年 (1896)	3.	東京統計協会会長花房義實より政府に1900年の国勢調査実行を建議 『衛生局年報 (明治 26.1 ~ 27.12)』内務省衛生局	総理府統計局: (1976) p.208-209.
明治30年 (1897)		『明治29年12月31日調日本帝国民籍戸口表』(内務大臣官房文書課) 花房道三郎 (1857-1921) [花房義實の弟] 内閣統計課長に就任	RP
明治31年 (1898)	3.	『明治30年12月31日調日本帝国民籍戸口表』(内務大臣官房文書課) 『衛生局年報 (明治 28.1 ~ 28.12)』内務省衛生局 (以後毎年)	RP
	6.15	新戸籍法制定 戸籍事務は司法省へ、人口統計事務は内閣統計局の所管に	細谷: (1978) p.305.
	7.13	司法省訓令により戸籍法取扱手続制定	総理府統計局: (1976) p.62-67.
	11.7	内閣訓令により調査方式改正 (加除式から調査時の戸籍人口に)	細谷: (1978) p.305.
	11.16	内閣訓令第1号乙号により、人口動態調査が、地方分室から中央集計方式に 花房道三郎内閣統計局長に就任 (〜大正5年) 日本帝国人口統計編纂 静態統計を主とし若干の動態統計を加える 花房道三郎、矢野恒太に死亡数の調査を命ず 日本帝国人口動態統計 編纂始まる (以下現在まで毎年)	細谷: (1978) p.305.
明治32年 (1898)			「日本人ノ生命ニ関スル研究 緒言」
明治33年 (1899)		第19日本帝国統計年鑑に乙種現住人口の規定を説明	総理府統計局: (1976) p.420.
明治34年 (1900)		『明治31年日本帝国人口統計』(内閣統計局)	RP
明治35年 (1901)	2-3.	国勢調査実施を貴族院・衆議院において可決 (年次は勅令)	総理府統計局: (1976) p.454-465.
	2.	国勢調査実施時期について、明治38年実施は困難の旨、政府委員の答弁	総理府統計局: (1976) p.455.
	8.	国勢調査実施の際、調査員約30万人、一切の経費190万~536万円と報告	総理府統計局: (1976) p.468.
	9.15	第一生命保険設立 (専務矢野恒太、保険業法による最初の相互会社) 『明治32年日本帝国人口動態統計』(内閣統計局) [フランス語の対訳付] 死亡表作成 (局第1表: 所在不明)	RP
明治36年 (1903)	12.1	第1回国勢調査実施を財政上の必要により明治43年に延期 『日本帝国人口動態統計』編纂 (以下大正7年まで、5年ごと)	「日本人ノ生命ニ関スル研究 緒言」 総理府統計局: (1976) p.552.
明治37年 (1904)	2.10	日露戦争勃発	
明治38年 (1905)	5.29	臨時台湾戸口調査部設置	
	9.5	日露講和条約	
		臨時台湾戸口調査実施	
明治39年 (1906)		ヒノエウマ年	
明治42年 (1909)	3.23	国勢調査実施の時期不確定の旨桂首相の答弁	総理府統計局: (1976) p.594.
明治44年 (1910)	春	死亡表作成 (局第2表)	「日本人ノ生命ニ関スル研究 緒言」
明治45年 (1912)	3.20	「日本人ノ生命ニ関スル研究 一名日本国民新死亡表」刊行 (内閣統計局)	RP予定
大正9年 (1920)		第1回国勢調査実施	

形: RP: 『国勢調査以前日本人口統計集成』に収録。 rp: 何らかの形で複製本出版済。 r: 著作に引用。 mf: マイクロフィルムで発行済。

文献: 杉: (1902) 世良太一編『杉先生講演集』明治35年。

細谷: (1978) 細谷新治『明治前期日本経済統計解題書誌』[—富国強兵篇 (上の1)—] 1978.3 一橋大学経済研究所日本経済統計文獻センター

速水: (1955) 速水 融「宗門改帳より壬申戸籍へ——維新期の人口調査とその一例——」三田学会雑誌 1: 47-12, 1954, 2: 48-9, 1955.

総理府統計局: (1976) 総理府統計局編『総理府統計局百年史資料集成』第2巻 人口 上

森田: (1944) 森田優三『人口増加の分析』日本評論社。

石井: (1981) 石井良助『家と戸籍の歴史』創文社。

福島: (1959) 福島正夫『「家」制度の研究 資料篇1』東京大学出版会。

新見: (1959) 新見吉治『壬申戸籍成立に関する研究』日本学術振興会。

八年の戸籍仕法改正についての法令であるが、新戸籍編成に当たつての原理は特に明記されていない。わずかに「人別を明らかに持成候儀、諸事の枢要万物生育の基にて」と、その重要性を訴えるのみである。また、推進した人物についても誰がその役に当たつたのか、特定し難い。文政八年当時、藩主は毛利斉元であつたが、藩主自身がこの種の改革に乗り出したとは考え難い。藩政の筆頭格は、堅田就正（宇右衛門）であり、四代に互つて地方の行政を担当したから、何らかの役割を果たしたかもしれない。

しかし、興味を引くのは、後に長州藩の藩政改革に手腕をふるつた村田清風（天明三年～安政二年）が、文政七年当職手元役、翌年郡奉行となつてゐることである。⁽¹²⁾ 確証はないが、村田ならば、新しい戸籍仕法を考える可能性は十分備えていたと考えられる。村田の思想を今日に伝えるものは、彼の作といわれている「某氏意見書」のみであるが、その一節に「人民に五人与を定むること古法にて……是を以て人民を土にありつけ、郡県の戸数を与立て、戸籍に録上して敢て混乱せしめず、他所に転移せざらしむること、是建国最初の大制度にして人民を治むる大本なれば、則ち軍法の起本なり」とある。⁽¹³⁾ この書は、そもそも村田の作であるか否か確証を欠いているし、もしそうだとすると、書かれた年代は分らない。しかし、もし村田の著作だとすると、古代中国を理想社会とし、二〇〇年の安逸に弛緩した武家社会を激しく糾弾した彼

が、農民をそれこそ「土地に縛り付ける」べく戸籍を編成しようとしたことは十分考えられる。

もう一つこの書から興味を引く箇所を挙げると、村田は、いざという時には、武士が一族郎党を率いて馳せ参ずるべきであるが、譜代の者を持たない場合には、百姓を招集すればよいこと、また、年貢を免除して百姓を兵として用いるほうが、藩にとっては財政上いいことを述べている。もし、この考え方が、戸籍編成に反映されているのだとすると、明治戸籍と徴兵令の関連の原形がすでにあつたことになる。

また、この戸籍が、住民の本貫の地、本籍地を明らかにするのを目的とするものであつたとするならば、明治初期の戸籍、さらには現在の日本において実際に用いられている戸籍と、編成の原理において通底するものがある、といえるだろう。

維新政府の戸籍編成 長州藩は薩摩藩と連合して維新の勝者となつた。慶応四年（一八六八）一月、鳥羽・伏見の戦いで幕軍が敗れ、四月には江戸が官軍の手に落ち、実際に維新政府が政権の座に着くと、九月には長州藩士榎村正直が京都府に議政官史官補として入り、民政を担当した。榎村は京都において、宗門改の続行を命ずる一方、一〇月二八日付けで「京都府戸籍仕法書」を発令している。⁽¹⁴⁾ まだ戊辰戦争の砲声が会津で止むか止まない内である。この仕法書に掲げられている戸籍の書式・記載内容を見ると、長州藩が実施していた「戸

籍」とほとんど同一である。それぞれの家族の持つ不動産、船舶、家畜のほか、職業、宗派、旦那寺等を記録するように示され、家族構成員については、年齢が記録時点で何歳か、また、詳細に婚姻関係を記すようになっている。すでに他家に嫁した者も、何年何月に、どここの誰のところに移ったのかを記し、本人の名前の上に、カギ印を記して、不在であることを示すようになっている。また、奉公人については、記載すべき事例がなく、その家に生まれたか、婚姻や養子縁組で入ってきた家族員のみを記載するようになっていた。したがって、これは、まさに「戸籍」であって、住民台帳ではない。

人口調査資料としては、現住地主義による宗門改帳の方が、はるかに現住人口を反映しているといえるが、京都府戸籍と同様の書式は、維新政府が東京に移り、東京付近の府県に到達した戸籍雛形にも見られ、さらに族籍を明記することが加わっている⁽¹⁵⁾。

ここに示したのは、明治三年一二月、武蔵国多摩郡地方で作成された戸籍の一家族であるが、前述の⁽¹⁶⁾ように、人口調査というより、人々の族籍を明らかにし、婚姻関係を明示し、本籍を確定することを通じて、この国の構成員たることを認めようとする政府の意図に沿った戸籍登録簿であることが示されている。

明治三年から四年にかけて、各地でこのタイプの戸籍帳が作成された。重要なことは、それと同時に、なお宗門改帳の

武蔵国多摩郡石田村戸籍（明治3年）

武蔵国多摩郡石田村戸籍（明治3年）									
召	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母
女	同	娘	妻	同	同	同	弟	妹	伯母

作成も続けられていたことである。場所によつては、二つの資料が残され、比較可能なところもある。このことは、明治戸籍が、決して宗門改帳を継ぐものではなかった力強い証拠である。宗門改帳の終焉は、維新政府が列国の要求に屈し、信仰の自由を認め、宗門改の廃止を命じた明治四年一〇月のことであつた。

政府は試行錯誤の末、明治四年四月、翌五年二月一日現在で、全国に同一書式による戸籍編成を命じた。世にいう壬申戸籍である。この戸籍については、研究も多く、付け加えるものはない。¹⁷⁾徴兵令の発布はさらに次の明治六年一月のことなので、壬申戸籍の作成時点で、徴兵忌避のため、この時点で戸籍から脱漏している者が多かったとは成し難い。

明治初期の人口調査 新戸籍法の制定に先立ち、維新政府は、明治三年五月に「在来ノ人別帳ヲ以」て、戸数人員を報告すべきことを命じている。ただし、廃藩置県以前だったので、報告は旧府県藩単位であり、しかも全国集計値は残されていない。現存する最後の弘化三年（一八四六）幕府全国人口調査のあと、人口統計史上の「空白の四半世紀」を経て、本格的な全国人口調査は、明治五年の、いわゆる壬申戸籍成立以降のことに属する。

ともかく、壬申戸籍に登録された日本全国の人口は、三三一〇万人であつた。これは昭和五年に、未登録人口を推定して求めた三四八〇万人より五パーセント少ない。¹⁸⁾しかし政府

が行つた最初の戸籍編成の結果であることを考慮するならば、この数字は決して事実から遠いとはいえず、むしろ登録率はかなり高かつたとすべきであろう。この点では、江戸時代に行われていた宗門改、人別改が、人々の戸籍登録への忌避を和らげる作用を演じていた、とすることも出来よう。しかしその後、大正九年（一九二〇）第一回国勢調査以前の「人口統計」は、特別の場合を除き、本籍人口を基準とし、寄留人口を加除して「現住人口」を机上で求める、という方式をとることになった。

明治一二年の試行的編纂の後、明治一三年から、内務省戸籍担当部局によつて、毎年の『日本全国戸口表』が印刷刊行されるようになった。¹⁹⁾初期統計の常として、表式が一定せず、数年ごとに変つてしまひ、さらに、この時期における行政区画の目まぐるしい変動が重なり、この統計を用いる觀察には制約が加わるが、当時全国で合計八〇〇以上あつた郡、区（都市）別の人口統計のごときは、この時期の社会経済史研究にとつて、貴重な情報源となる。明治一九年から三〇年にかけては、標題が『日本帝国民籍戸口表』と変わり、形式がやや簡略化されたが、なぜか明治一九年一二月三十一日調べのものに限り、当時の道府県別に男女別、各歳別、配偶別の数値が記載されており、人口学や家族社会学的分析の絶好の材料となるものも含まれている。²⁰⁾初期統計の気紛れの恩恵ともいふべきであろう。

明治三十一年以降、人口統計は新設の内閣統計局の手によって編纂されることとなり、初代局長の花房直三郎は、従来の統計に変えてかなりの改良を行った。人口統計を静態統計と動態統計の二つに分け、静態統計は明治三十一年以降、五年に一度、動態統計は明治三十一年以降毎年刊行するようになった。動態統計は現在も引き続いて刊行されている。花房以降の人口統計はまた、横組でアラビア数字を用い、明治三十一年の統計を除いて、表頭をフランス語併記とし、国際的に利用可能な形をとるようになった。

しかし、繰り返すように、これらの統計に出てくる「人口」は、戸籍に登録された人口であつた。それが抹消される手続がなされない限りは、いつまでも登録され続けたから、一方で、前記の明治一九年末の各歳別の人口分布を見ると、受け入れ難いような高齢者が存在することになっている。他方、明治二十一年以前においては、戸籍脱漏者の数も多く、折角統計書に出生数が掲載されていても、それを用いて出生率を求めるのは冒険に等しい。脱漏者や出生の届け出漏れが激減するのは、全国的には明治二十二年以降とされている。逆にいえば、それ以前の出生や死亡の数字は信頼性が低いので、人口転換の理論を、この統計をそのまま用いて、立証あるいは反証することは危険である。

加えて、本籍人口と現住人口の問題がある。明治統計に出てくる「現住人口」とは、本籍人口に寄留人口を加除して計

算したものであつた。これは、移動する人が、寄留の手続きを完全に行うことを期待して求められるものである。しかし、実際には人々は手続きをしないで移動してしまつた。最も多いのは、一旦寄留手続きをして都市へ出た人が、その寄留の解除届けをしないで、都市の中で移動し、新しい移動先に寄留手続きをしてしまう例で、これによって、寄留人口は、本来ならば出寄留と入寄留が全国合計では同一になるべきなのに、入寄留が出寄留を上回るという結果を生んだ。その数は、明治三二年で、すでに一六九万人、全国人口の約四パーセントに達している。

この差を無視しえないとして、花房は、明治三十一年以降「現住人口」を甲種現住人口と乙種現住人口に分け、出寄留・入寄留の差を道府県で按分比例し、その差をゼロとするような操作を加えた「現住人口」を乙種現住人口、加えない人口を「甲種現住人口」と呼ぶことにしている。さらに、明治四十一年以降は、静態統計に警察による独自の人口調査を大都市について掲載している。戸籍による人口調査が、実数を示していないことを自ら認めた結果である。

このように、国勢調査以前の日本の「人口統計」には、色々な欠陥があり、そのことが人口学者をして、この時代の人口を分析することを躊躇させてきた。しかし、欠陥がどういう性格のものであり、それが結果にどのように反映するかを見極めれば、これらの統計は十分に利用可能である。とく

に、本格的な工業化、都市化の開始以前、つまり明治前期については、本籍人口、あるいは当時の「現住人口」は、現実の人口とそれほどかけ離れてはいなかった、と見ることも出来るだろう。

三 遠かった国勢調査への道

以上のように、大正九年の第一回国勢調査の実施以前においても、政府は詳細な人口調査を行い、統計を編纂発行していた。しかし、それは近代の国勢調査を通じての人口調査ではなく、別個の目的をもった戸籍編成を通じてであった。極論すれば、この時期の人口統計は、戸籍編成の副産物として、便宜的に求められたものである。

しかし、すでに早くから、戸籍編成と人口調査は別個であり、国勢調査の必要を説いていた見識者がいたことを見落としてはならない。

それは杉亨二（一八二七—一九一七）である。杉の生涯については他に譲るとして、⁽²²⁾ここで強調しておきたい事は、先ず第一に、彼が維新前から洋学に接し、ヨーロッパの統計学や国勢調査についての知識を持っていた事である。長崎に生を受けた彼が、蘭学を自然に身に着けたことは十分理解できる。成長の過程で、一時適塾の書生となったこともあったが、杉が本格的にヨーロッパの学問と出会ったのは、江戸に出てきてからのことである。杉は、江戸で蘭学を磨いたばかりでな

く、ドイツ語にも熟達し、地理書や教育統計書に接したことが、やがて統計作成、国勢調査の必要を説く下地になった。武士出身でもない杉が、幕府の洋書取調所に出仕するようになったのは、その能力を買われたからであろう。おそらく文久二年（一八六二）に、そこでオランダの統計書に接し、また、幕府の留学生、津田真道、西周らがオランダから帰国するに及んで、統計学を知る機会を持ったことが、杉の国勢調査実施への執念を燃やす口火となったものと思われる。

だが、幕末の政治変動は、幕府を瓦解に導き、慶応四年、旧將軍家は、一大名として静岡の藩主となった。幕府の禄を食んでいた杉は、一行とともに静岡に移ったが、ここから先が杉の非凡なところで、中央を放逐されながら、逆にそのことを利用して、限定された範囲ではあるが、宗門改とも戸籍編成とも違う、近代的国勢調査の先駆とでもいうべき人口調査を行うのである。それには、無謀とも思われる杉のこの計画実現を支持した旧幕臣達の英断、また、調査対象となった駿河が、徳川家ゆかりの地であったこと等を加えなければならぬとしても、戊辰戦争がまだ北辺で戦われている最中に、このような調査が企てられ、実施されたこと自体、驚嘆に値する。

杉の行った調査は、静岡、江尻（清水）、原、沼津の諸都市であったといわれているが、今日、調査結果が得られるのは、明治二年五月調査の「駿河沼津政表」と、同年六月調査

の「駿河原政表」の二つである。⁽²³⁾ 双方とも、調査結果の書式は同一で、人口総数、男女年齢別（一〇歳未満は各歳、以上は五歳刻み）、配偶の有無、出生地、詳細な職業、出稼、入稼についての統計表を含んでおり、国勢調査と同様の調査を考慮していたことが窺われる。注意すべきは、この調査には、一切の族籍別、身分別の集計のないことで、これは、士農工商の別を強く否定していた杉の思想の反映といっていだろう。

こういった杉の静岡県時代の活動は、直ちに中央政界の聞くところとなり、明治三年七月、杉は請われて政府に出仕する。杉の回顧によれば、これは渋沢栄一の推挙によるもので、政府としては、杉に差し迫った戸籍編成の仕事を担当させたかったとのことである。しかし、維新政府の戸籍編成は、依然として族籍を引きずり、国勢調査には程遠く、杉の目指すものとは異なっていた。杉は程なく席を蹴って静岡に帰ってしまう。しかし、静岡にあっても、杉は政府に政表編成の必要を説き、四年一〇月、政府に再出仕する。と同時に政府に太政官直属の政表課が置かれ、杉は早速「辛未政表」（明治四年）、「壬申政表」（明治五年）の編成に没頭した。壬申戸籍の編成は、民部省の管轄であったから、杉とは関係のない部局で進められていた。

しかし、杉は、太政官政表課長として単に政表を作成することでは満足出来なかった。明治七年二月に発足した当時の

知識人の団体である明六社の同人として入社し、啓蒙的思想家の持ち主と交流を持つようになる。と同時に、維新政府が壬申戸籍の調査結果に基づいて、「人口統計」を発表するようになる、そもそも戸籍編成は人口調査とは異なるものである、という考えの持ち主の杉は、独自に全国人口調査の必要を考えるようになる。一挙に全国調査を行うことは出来ない、パイロット調査として、山梨県（甲斐国）をえらび、調査票も駿河の調査に加えて、センサス個表とでもいふべき家別表を案出し、調査員を訓練して、明治十二年二月三日時点での『甲斐国現在人別調』を実施した。⁽²⁴⁾

杉は、調査の対象となった山梨県に随員とともに調査の後二度赴いているが、その中には、後に日本の人口統計学の祖の一人となった、呉文聡も含まれている。杉がいかに統計家として強い職業意識をもっていたかは、以下のことで分かる。まず彼は、この調査にかけた費用計算をした。総費用は、約五七六〇円であったが、これを山梨県の人口で割ると、一人当たり一錢四厘四毛四糸になる。さらにこれを全国人口に掛ければ五二万円余になる、としている。因みに、当時の日本の政府予算は、約六三〇〇万円であった。

また、準備と後の編集のための時間は、それぞれ四年ずつ必要だから、全国調査は一〇年に一回が適当である、と説いている。杉自身は、この調査が、内務省戸籍局系列の「人口調査」とは違って、欧米の国勢調査に優るとも劣らないもの

であることを、自信をもって述べている。

そこから先が杉の独壇場で、彼は、維新政府による日本の人口調査が、壬申戸籍を基準にして、寄留や増減を加除して机上で求めていることを批判し、人口調査には訓練を受けた専門家が必要であること、戸籍簿調には、毎年一二〜一三万円が必要だが、一〇年間ではその一〇倍が消費される。杉の唱えた全国人口調査の費用は、その半額で済むから、長期的にはこの方が安くなる、とさえ言っている⁽²⁵⁾。

『甲斐国現在人別調』が完成し、刊行をみたのは、明治一五年六月のことであつたが、すでにその直前から杉の前途には暗雲が立ちこめていた。それは明治一四年の政変で、この年の一〇月、大隈重信が罷免され、政府の薩長藩閥的性格がますます強化され、また、紙幣整理を目的とする松方財政への転換によつて、一挙に緊縮が求められるようになった。その結果、杉は彼をかつていた庇護者を失い、また、国勢調査を行う財政的支援も失うに至つた。明治一八年には杉の仕事場であつた統計院自身も廃止され、杉も官界から身を引かざるを得なくなり、最初の国勢調査の機会は潰れてしまつた。

第二の機会は、一九〇〇年(明治三十三年)を期して、列国が共通して国勢調査を行うべし、とする意向がベルギーで開かれた万国統計協会から打診され(明治二十九年)、日本政府においても回答をする必要が生じた時である。すでに国会開設以後のことであり、貴族院、衆議院から実施について法律案

も提出されている。この時の案をめぐつて議論が重ねられたが、誰も国勢調査実施に積極的に反対する者はいなかつた。

ただ、花房は、いかにそれが調査技術の上で困難であるか、また膨大な費用を要するかを述べている。結局、明治三十三年の実施は、軍備強化に狂奔していた当時、予算が付かず、見送られ、明治三十八年(一九〇五)実施を期することになった⁽²⁶⁾。

そして、このやりとりの産物として、明治三〇年、内閣統計局が設立され、初代局長に花房が就任した。結果的には、国勢調査の実施にはもう二〇年余を要したけれども、人口調査の方法、内容、統計の編纂、出版の方法、内容は大きく変わり、明治三十一年の『日本帝国人口統計』、三十二年以後の『日本帝国人口動態統計』、三十六年以降の『日本帝国人口静態統計』、さらには、生命表の作成へとつながつてゆく。こういう点を考慮するならば、花房の名前は、日本の近代人口統計史上、杉とともに特筆すべき人物として記録されるべきであらう。

国勢調査自体は、明治三十五年法令が出され、明治三十八年(一九〇五)に第一回の調査が行われることになつたが、明治三七・三八年の日露戦争によつて実施は順延となり、さらに大正三年には第一次世界大戦が勃発し、さらに延びてしまつた。第一回調査の実現を見たのは、漸く大正九年(一九二〇)のこと、欧米列国に比べて遙かに遅く、アジアのなかでも最も遅い方である。しかし、準備万端整つてからの実施であ

つたため、初回から信頼性の高いものとなった。

四 多彩な人口統計群像

国勢調査以前の人口調査については、ざっと概観しただけでも、裏には以上のような、苦難の歴史があった。国勢調査の結果と比較して、それらの統計の信頼度を云々することは易しいけれども、そのゆえにこれを利用しないのでは何の意味もない。むしろ、われわれに課された課題は、これらの貴重な統計資料を、その性格を考慮しつつ、如何に積極的に活用してゆくかである。

また、ここで採り上げた統計以外にも、人口を知りえる統計が存在することを付け加えて置こう。一つは、軍部の調査による『共武政表』および『徴発物件一覧表』で、明治八年以降編纂発行されており、マイクロフィルムおよび復刊本で容易に見ることができるようになった。⁽²⁷⁾人口は、戸籍局系列の数値を用いたとされているが、都市人口に関しては、早くから別掲されており、また、明治二四年版では、江戸時代の村に相当する、市町村内の大字別人口等を知ることが出来、本格的なデータベース化が望まれる。

また、もう一つのソースは、衛生統計である。これは内務省衛生局によって作成され、明治八年以降発行された。最近、『明治期衛生局年報』として復刻されはじめている。⁽²⁸⁾そのなかには、人口に関する諸指標が含まれており、死亡について、

高次の分析結果が期待される。

さらに、『日本帝国人口動態統計』の詳細版とでもいうべき、『日本帝国死因統計』がある。これは動態統計のうち、単に死亡原因別を詳細に表示したのみならず、職業別死因統計を示していることによつて、『静態統計』では得られない、職業別の人口構成を推計し得る貴重な統計となっている。⁽²⁹⁾これは今日、アクセス困難であり、何らかの形で復刊が望まれる。

明治期の統計を取り扱う際、頭痛の種になるのは、転々とする行政区域の変化である。これが一応落ち着くのは、明治二二年の地方制度の確立をもつてであるが、その後ですら、現在の東京都の西部多摩郡地方は、明治二四年三月末日まで神奈川県であった。連続した統計的観察を行うためには、領域を同一に確定する必要がある。そのためには、府県の境域一覧が必要になるが、たとえば、内閣統計局編『府県及北海道境域沿革一覧』(明治四三年)⁽³⁰⁾が最近復刻され、容易に見ることができるようになった。

ところで、明治三八年、日本内地では国勢調査は行われずに終わったが、一種の国勢調査が、同年一〇月、台湾総督府臨時台湾戸口調査部によって実施された。『臨時台湾戸口調査』がそれで、調査内容からいって完全に国勢調査である。実施された明治三八年は、日露戦争がなければ、日本内地において最初の国勢調査が行われていたはずの一九〇五年に当

たり、戦争直後のこの時に、このような調査が行われたこと自体驚くべきことである。当時の台湾総督は、児玉源太郎で、日露戦争時の満州軍総参謀長でもあった。実際には、総督府の民政的な仕事は、彼を補佐した民政局長後藤新平が行ったが、この国勢調査の実施を指揮したのは、杉の設立した共立統計学校の出身で、当時総督府統計課長だった水科七三郎であった。⁽³¹⁾内地においては実施しえなかった調査が、杉の指導を受けた者によって植民地台湾において行われたのである。

以上のように、国勢調査以前にも、日本は豊富な人口統計を持っている。今までそれらがあまり利用されなかったのは、何と言っても国勢調査以降の数値と比べて、信頼度が低く、近代人口学の分析に耐えられないという怖れからであった。

また、資料がいか所に揃っていない、収集に費用と時間がかかり過ぎる、ということも大きく影響していた。しかし、復刊書の刊行によって、第二の障害は消滅している。また、第一の理由も、いささか食わず嫌いな点もある。利用が簡単に出来るようになれば、少なくとも部分的には克服されるであろう。

以下、明治前期人口統計を用い、いくつか観察実例を示しておこう。第一表および第二表は、明治一二年末の『甲斐国現在人別調』の人口数と、戸籍を材料とした明治一三年初調への『日本全国人口表』の人口を比較したものである。郡毎の人口、および、『日本全国人口表』の年齢区分に従い、年齢別人口を比較した。甲斐一国としては、両者の差は一パー

セント以下であるが、西山梨郡においては、『現在人別調』の人口が『人口表』のそれをかなり上回っている。西山梨郡には、県庁所在地の都市、甲府があり、明治一二年の『共武政表』（数値は明治一三年一月一日時点の調査とあるが、それが人口表の数字とは一致せず、むしろ『現在人別調』の人口に近いことは注目すべきである）によれば、甲府の人口は一八三九四人で、西山梨郡人口の約五〇パーセントに相当する。『現在人別調』の人口数を実際に居住していた人口と考えたと、西山梨郡における差は、甲府の人口が大きく影響していたものと考えざるを得ない。すなわち、都市甲府には、本籍人口以外に、かなりの流入人口があり、それが二つの統計における人口数の差となって反映されているのである。

もつとも、他の郡部の人口については、二つの統計に現れる差は、それほど大きなものではない。南巨摩郡が二・五パーセントとやや高いが、他は、すべて一パーセント台、もしくはそれ以下で、都市部以外では、この時期の戸籍に基づく『人口表』の人口数は、十分信頼出来ることを物語っている。

年齢階層別人口の比較では、『現在人別調』における二〇歳以上五〇歳未満の人口では、『人口表』を上回り、一方、五〇歳以上八〇歳未満の人口では、逆転している。前者は、生産年齢人口と置きかえることも出来るので、他県からの流入人口があったのだらう。他方、高年齢層では、本籍人口の過大登録があったのではなかろうか。とくに、農村部ほど

第1表 『甲斐国現在人別調』と『日本全国人口表』の比較 (I) 男女別・郡別人口

山梨県 郡名	男子人口		女子人口		総人口		比率(人口表/現在) %		
	現在人別	人口表	現在人別	人口表	現在人別	人口表	男子	女子	合計
西山梨郡	17738	16316	18001	16316	35739	32632	92.0	90.6	91.3
東山梨郡	24118	24160	23918	23550	48036	47710	100.2	98.5	99.3
東八代郡	21067	21173	21141	20853	42208	42026	100.5	98.6	99.6
西八代郡	17137	16960	17302	17297	34439	34257	99.0	100.0	99.5
南巨摩郡	20916	21428	20894	21431	41810	42859	102.4	102.6	102.5
中巨摩郡	30935	31356	32074	32382	63009	63738	101.4	101.0	101.2
北巨摩郡	28967	29308	28954	29258	57921	58566	101.2	101.0	101.1
南都留郡	19849	19747	20517	20382	40366	40129	99.5	99.3	99.4
北都留郡	16935	16892	16949	16887	33884	33779	99.7	99.6	99.7
合 計	197662	197340	199750	198356	397412	395696	99.8	99.3	99.6

第2表 『甲斐国現在人別調』と『日本全国人口表』の比較 (II) 男女別・郡別人口

男子人口 郡名	7 年 未 満		7 年 以 上		2 0 年 以 上		5 0 年 以 上		8 0 年 以 上	
	現在人別	人口表	現在人別	人口表	現在人別	人口表	現在人別	人口表	現在人別	人口表
西山梨郡	3347	3138	4109	3911	7784	6631	2476	2330	23	17
東山梨郡	4302	4527	5978	5414	9990	10176	3773	3978	74	65
東八代郡	3951	4070	5174	4929	8685	8417	3197	3691	60	66
西八代郡	3170	3031	4071	4021	7000	6981	2846	2861	50	66
南巨摩郡	3624	3620	5091	5585	8724	8585	3412	3553	65	79
中巨摩郡	6037	6180	7613	8532	12843	12116	4360	4443	81	85
北巨摩郡	5300	5235	7048	7089	12056	12278	4459	4627	103	76
南都留郡	3512	3715	4705	4664	8155	7924	3373	3343	103	101
北都留郡	2871	2950	3839	3763	7071	6815	3071	3280	83	84
合 計	36114	36466	47628	47908	82308	79923	30967	32106	642	639

女子人口 郡名	7 年 未 満		7 年 以 上		2 0 年 以 上		5 0 年 以 上		8 0 年 以 上	
	現在人別	人口表	現在人別	人口表	現在人別	人口表	現在人別	人口表	現在人別	人口表
西山梨郡	3340	3262	4096	3563	7688	6799	2825	2647	54	45
東山梨郡	4335	3949	5925	5712	9494	9333	4049	4464	114	92
東八代郡	3740	3973	5089	4698	8564	8365	3646	3695	102	122
西八代郡	3084	2956	3944	4146	6863	6732	3266	3320	143	143
南巨摩郡	3516	3535	4866	5481	8479	8355	3931	3938	101	122
中巨摩郡	5688	6091	7859	8238	12980	12588	5388	5310	159	155
北巨摩郡	5303	5361	6878	6970	11586	11630	5045	5184	142	113
南都留郡	3565	3699	4771	4911	8195	7824	3826	3809	160	143
北都留郡	2848	2922	3993	3977	6785	6612	3190	3242	133	134
合 計	35419	35748	47421	47696	80634	78238	35166	35609	1108	1069

『人口表』の高齢人口が『現在人別調』のそれを上回っていることが、それを物語るように思われる。

次に、明治一九年一月三十一日調査の、『日本帝国民籍戸口表』により、道府県別の男女特定年齢の有配偶率を測定し、地図上に示してみよう。⁽³²⁾ さきに述べたように、この『戸口表』は、この年に限って、道府県別の男女人口を、各歳刻みで、しかも配偶の有無別に掲載している。本格的工業化、都市化、民法制定以前の日本の人口の各歳別統計、配偶率を知る極めて貴重な資料である。もちろん、この資料に記載されている人口は、本籍人口であるが、近代社会への本格的变化直前の時期であり、都市部を除けば、ほぼ実際の状態を示しているものといって差し支えないだろう。

男子は二五歳、女子は二〇歳（いずれも数え歳）をとって、有配偶率をみたのが、第一図および第二図である。ここで求めた有配偶率は、調査時点で結婚しているか否か、つまり composition being married であって、既婚率 composition ever married ではないことに留意しなければならないが、図は明らかに、配偶率に大きな地域差のあったことを示している。奥羽地方から東日本にかけて高く、中央日本でもっとも低く、西日本や北海道でもかなり低い。この傾向は、男女ともほぼ同様であって、両者に大きな差はない。

地域差の幅は、かなり顕著で、例えば、男子の場合、最高値をとる岩手県は、六二・七パーセントであるが、最低値を

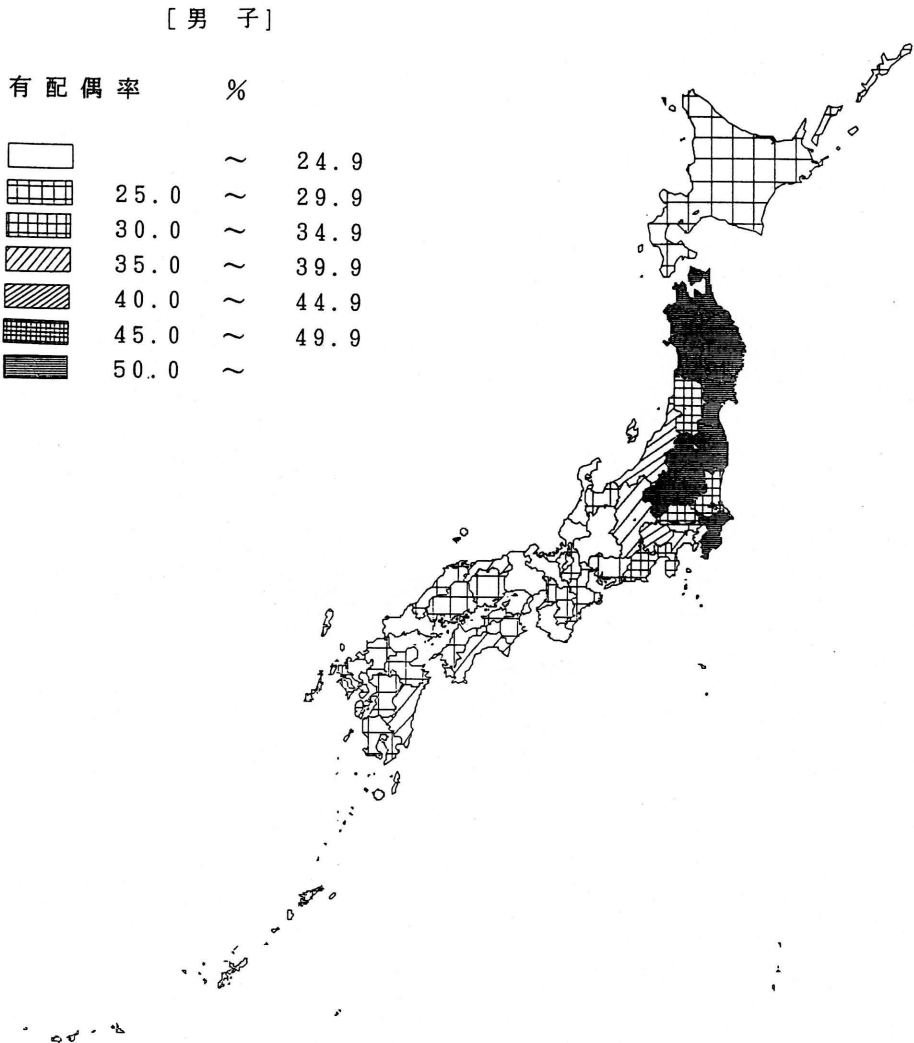
示す和歌山県では、一五・九パーセントであった。女子でも最高値と最低値は、それぞれ男子と同じ岩手・和歌山両県で見られるが、岩手県では、六五パーセント、和歌山県では、二二・九パーセントとなっている。

有配偶率の分布には偏りがあって、男子の場合、中位値より高い県は、奥羽および、東京・神奈川を除く関東全域と静岡県が含まれる。女子では、奥羽全域と群馬、富山、静岡、高知の四県が含まれる。低いほうは数値が連続的で、グルーピングし難いが、近畿各府県、東京府、福岡・佐賀両県が、低位四分の一に含まれている。

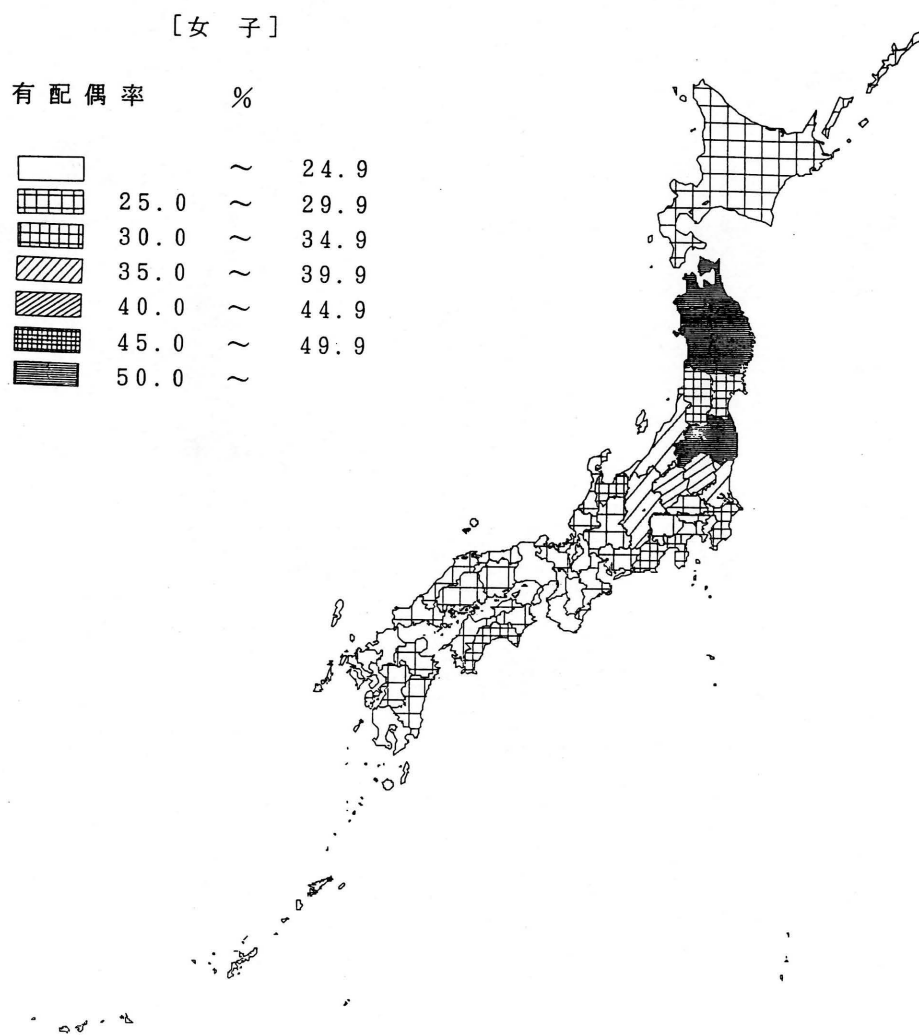
何故このような顕著な差があるのだろうか。ここでは詳細な分析は避けるが、当然これは結婚年齢の差と絡んでいる。前記の年齢の有配偶率が高いところは、結婚年齢が低く、率の低いところは、年齢が高い。かつて筆者はこの資料を用いた平均結婚年齢の測定で、大体、静岡、長野、富山を結ぶ線を境に、東と西で平均結婚年齢に有意な差のあることを発見した。奇しくも、地質学上の分界線であるフォッサ・マグナと重なるのである。⁽³³⁾

このように、人口統計からだけでも、今まで知られていなかった明治前期の日本の状況を明らかにし得る局面は多い。⁽³⁴⁾ さらに、当時の他の統計、例えば物産統計等と組み合わせることによって、明治期日本の数量史的分析の世界は、大きく広がっているといえるだろう。

第1図 25歳男子の有配偶率（明治19年末）



第2図 20歳女子の有配偶率（明治19年末）



五 附、「江戸幕府国別人口表」

最後に附篇として江戸幕府の行った国別全国人口調査を表にまとめておこう。ただし、これは原資料に遡ったものではなく、関山直太郎氏によって作成された「国別人口表」⁽³⁵⁾に、南和男氏が新しく発見され、発表された数値を加え、筆者自身のコメントを付したものに過ぎない。もともと、原資料といっても、調査時点の史料原本はなく、現在明らかになっているのは、いずれも後年の写本であるから、写す過程ですでに間違った可能性を含んでいる。

第3表 幕府調査国別人口表

国名	享保 6年 (1721) ㊤	寛延 3年(1750) ㊤			宝暦 6年 (1756) ㊤	天明 6年(1786) ㊤			寛政 4年(1792) ㊤			寛政 10年(1798) ㊤			文化元年(1804) ㊤		
		合 計	男子	女子		合 計	男子	女子	合 計	男子	女子	合 計㊤	男子	女子	合 計㊤	男子	女子
06 陸奥	1962839	1836134	1019138	816966	1806192	1563719	826775	736944	1568218	827433	740785	1589108	837908	751270	1602948	846758	756190
09 出羽	877650	846255	479223	367052	838446	804922	434000	370522	816770	439142	377627	852959	458364	394595	870149	467307	402842
10 上野	569550	576075	315609	260456	579987	522869	280492	242377	513915	278133	235782	514172	277759	236413	497034	266207	230827
11 下野	560020	554261	309011	245250	533743	434797	240354	194337	404818	182562	141337	223160	190177	404495	218163	186332	186332
12 常陸	712387	655507	361246	294261	641580	514519	278462	236057	495803	266326	228757	492619	264270	228349	485445	259502	225943
13 小計	1841957	1785843	985866	799967	1755310	1472185	799308	672871	1413816	766715	647101	1420128	765189	654939	1386974	743872	643102
14 武蔵	1903316	1771214	1006494	764520	1774064	1626968	906182	720786	1634048	899569	734479	1666131	908341	757190	1654368	898864	755504
15 相模	312638	310796	167781	123005	305569	279427	148887	130540	277699	147775	129924	277211	147466	129745	278068	147927	130141
16 上総	407552	453460	237695	215765	438788	388542	200442	188100	376441	196699	181742	368831	189813	179013	364560	187435	177125
17 下総	542661	567603	307441	260162	565614	483526	257761	225765	468413	250254	218159	484641	255915	228726	478721	252512	226209
18 安房	115579	158440	83021	75409	137565	125052	66720	58332	130836	68105	62731	133513	68592	64921	132993	68404	64589
19 小計	3281746	3261513	1802632	1438861	3221600	2903515	1579992	1323523	2887437	1560402	1327035	2930327	1570127	1359595	2908710	1555142	1353568
20 佐賀	95748	90476	46867	43609	90511	91097	46355	44742	90561	46249	44312	91430	46477	44953	92410	46917	45493
21 越後	932461	970185	518703	451482	1013331	954524	492488	462036	1011087	526169	484898	1053674	567681	511605	1072904	553477	519427
22 越中	314158	313562	165793	147769	313710	317265	166671	150594	327327	173429	153898	337229	178083	159041	345419	181222	164477
23 能登	152113	157765	79073	77792	212048㊤	137427	69484	67943	159436	81319	78117	165188	83966	81222	167534	85054	82480
24 加賀	206493	202429	108027	94402	160778㊤	196732	107924	83808	189682	99117	90565	192738	100992	91746	196725	102606	94119
25 富山	367652	348052	178316	169736	344830	332019	170629	161390	335813	175286	160527	350833	181543	164920	354038	183171	170867
26 石川	86598	78072	38401	39471	77729	79323	39340	39983	76124	38209	37915	78356	39409	38947	78715	39706	39009
27 小計	2155663	2160541	1135380	1024261	2212937	2108387	1092891	1010496	2190010	1139778	1050232	2269448	1198151	1096804	2307745	1192153	1115592
28 甲斐	291168	311193	158878	156315	317349	305934	154848	151086	284474	148865	135609	309604	156696	152909	297903	150272	147631
29 信濃	679394	686651	360490	326161	706974	723295	377960	345335	714199	372290	341909	742791	386583	356208	748142	388859	359283
30 飛騨	67032	72323	37914	34409	74907	77939	40920	37019	76401	39881	36520	79393	41279	38114	81768	42540	39228
31 小計	1052147	1070167	557282	516885	1099230	1107168	573728	533440	1075074	561036	514038	1131788	584558	547231	1127813	581671	546142
32 伊豆	96650	105120	53806	51314	105272	120629	62729	57900	98226㊤	50345	47881	102551㊤	53200	49351	125505㊤	63930	61575
33 駿 河	245834	313819㊤	161388	151431	250582	242165	126085	116080	242457	125522	116935	248127	128887	119240	252072	131130	120942
34 遠 江	342663	333744	186857	166887	341724	332100	167368	164733	334246	168738	165508	352033	178087	173946	342398	173548	168850
35 三 河	141204	149283	208406	218077	425745	419349	207832	211517	360795㊤	178891	181904	423893	209587	214306	420697	207466	213231
36 尾 張	554561	553340	279810	273350	576363	595264	301592	293672	582183	293715	288468	605084	305224	299860	605686	305196	300490
37 美 濃	545919	533095	272630	260461	543510	556165	287934	268231	536904	275170	261734	563863	288504	274359	566355	291403	274952
38 小計	2201831	2258401	1162897	1121520	2243196	2265672	1153540	1112133	2154811	1092381	1062430	2295551	1163489	1131062	2312713	1172673	1140040
39 山 梨	564994	522626	276640	245686	527334	507488	266123	241365	506324	265124	241200	480993	250343	230650	469519	242920	226597
40 大 井	413331	374041	189258	184783	367724	336254	173848	162406	329286	170149	159137	344043	176983	167060	340706	174767	165940
41 河 内	243820	231266	114651	116315	206568	205585	104084	101401	209296	106545	102751	218102	110811	107291	214945	109009	105936
42 和 泉	218405	207952	104723	103229	226480	190762	96855	93907	190466	96501	93965	199083	100089	97994	202283	103193	99900
43 摂 津	809427	803595	426756	376839	841981	801220	416238	384861	791962	393784	398178	806578	418644	387934	788857	410966	375891
44 小計	2247792	2139480	1112028	1026852	2170087	2041309	1057148	984061	2027334	1032103	995231	2048799	1056870	990929	2017310	1040855	973454
45 近 江	602367	575216	290500	284716	573797	583940	298619	285321	573617	284270	289347	538412	253717	264725	532968	271198	261670
46 伊 勢	95978	91392	47149	44243	88526	82352	42434	39918	79648	41003	38645	80647	41363	39284	80196	40697	39499
47 伊 志	543737	523037	259363	263674	519187	478906	240016	238890	462682	241169	221513	477899	239059	238840	476500	237183	239317
48 志 摩	31856	34068	16236	17832	34261	37184	18053	19131	36888	17960	18928	38617	18916	17901	37875	18544	19331
49 紀 伊	519022	508174	282475	225699	512898	500621	260110	240461	478499	247145	231354	473609	244903	228703	477361	245624	231737
50 淡 路	105226	107113	54792	52321	107120	106161	54683	51478	104352	53679	50673	104269	53731	50538	112449	58926	53523
51 播 磨	633725	551393	314490	284911	627943	607758	319764	287994	602410	315773	286637	608890	318881	290009	599401	314490	284911
52 丹 波	284893	276336	143620	132705	282018	281356	150927	130429	275038	142740	132298	281234	145949	135285	282493	146708	135785
53 小計	2816804	2666729	1408625	1306101	2745750	2678278	1384606	1293622	2613134	1343739	1269395	2603577	1316519	1267085	2599243	1333470	1265773
54 丹 後	125276	134476	68698	65778	135392	141191	71668	69523	141364	71628	69736	146762	74680	72082	147403	74805	72598
55 但 馬	149732	156613	83367	75246	154980	158455	82525	75930	160030	83387	76643	164764	86103	78661	167549	87252	80297
56 因 幡	122030	125085	66907	58176	125091	123622	66155	57467	123532	65173	58359	126695	67023	128643	68329	60314	60314
57 伯 耆	132981	140719	75362	65357	144552	155289	82710	72579	155532	83843	71689	166449	89056	77393	169570	90442	79128
58 隠 岐	18133	84951	9529	9402	19548	20707	10382	10325	21072	10538	10534	21963	11003	10960	10882	10778	10778

59	出雲	222330	234896	120354	114542	220094	258916	135108	123808	260189	135373	124816	271667	141891	129776	279177	146122	133055
60	石見	207965	219512	112583	107529	259202	229113	122431	106682	225783	117191	108592	248076	127234	118842	245203	128163	117040
61	小計	978447	1030232	536800	496030	1058859	1087293	570979	516314	1087502	567133	520369	1146376	598990	547386	1159205	605995	553210
62	美作	194226	175168	99079	76089	172431	157767	86061	71616	132445⑤	73154	59291	157066	87680	69386	153397	85188	68209
63	備前	338523	322982	170445	152537	325550	321627	172861	148766	316881	170292	146589	321221	173230	147991	321221	152200	146073
64	備中	333731	319410	192396	173014	325531	316904	167707	140997	316735	128030	188705	327100	173527	153573	328408	174097	154211
65	備後	321008	306818	158102	148716	310989	303731	157664	146067	307029	159049	147960	315363	163579	151784	318577	165096	153481
66	安芸	361431	396878	202040	194938	414209	454112	237132	216980	446261	242159	224102	491278	256216	235062	499081	260312	238769
67	周防	262927	289392	152660	136732	291334	344800	178718	160082	351110	181845	169265	357507	181586	171921	358761	158573	170188
68	長門	212124	226934	122274	104660	233307	241037	126200	114837	240921	127213	113708	245020	128680	116340	247012	130337	116675
69	小計	2023970	2037582	1096996	986686	2073351	2139958	1126343	1005345	2131382	1081762	1049620	2214555	1164498	1046057	2223509	1125803	1047606
70	阿波	342386	336905	185881	177024	363254	369280	190212	179068	368536	189218	179318	375358	192615	182743	425304	220157	205147
71	讃岐	334153	357326	189960	167366	362874	384851	205050	179801	386062	213177	172885	396122	210777	185345	395980	210187	185793
72	伊予	504045	499860	265834	234026	508592	514773	273838	240935	516186	273586	242600	531378	281120	250258	529829	279687	250142
73	土佐	351547	368192	196577	171615	372766	392597	211517	181080	387040	208070	178970	399702	215564	184138	409413	221049	188364
74	小計	1532131	1562283	838252	750031	1607486	1661501	880617	721029	1657824	884051	773773	1702560	900076	802484	1760526	931080	829446
75	筑前	302160	307439	171876	135561	306173	307778	170917	136861	304199	168428	135771	307982	169420	138562	313420	170832	142588
76	筑後	266426	260875	156546	104329	263176	270448	159002	114446	273293	140504	132789	272239	159433	112806	277579	170331	110248
77	肥前	609926	632923	341887	291036	647831	662342	337612	309175	678029	364258	313771	674272	354636	319636	712654	373681	338973
78	肥後	19993	23200	12305	10895	23404	23391	12429	10962	24771	13205	11566	24968	13211	11757	25368	13478	11890
79	対馬	16467	14800	7640	7160	119730⑤	14136	7518	6618	14013	7502	6511	13786	7275	6511	13862	8134	5728
80	豊前	248187	242653	129086	113567	254195	237537	126926	110611	236331	126288	110043	234342	124896	109444	235950	125702	110248
81	豊後	524394	511880	273145	238735	521706	469687	247870	221817	468200	246561	221639	464722	244033	220689	466106	244023	222083
82	小計	1987553	1993770	1092485	901283	2028458	1985319	1062274	907490	1998836	1066746	932090	1992311	1072906	919405	2044939	1103181	941758
83	肥後	614007	620244	329275	290969	621294	646892	337612	309280	656035	341027	315008	663414	343068	320346	671316	346507	324809
84	日向	211614	225421	126409	99900	225713	230133	125820	104313	228691	124840	103851	229624	125570	104054	230783	125856	104927
85	大隅	112616	131623	74052	57571	132787	126022	69448	56574	121031	66422	54609	116167	63114	53053	114166	61721	52445
86	薩摩	149039	194312	106960	87352	205385	237889	125912	111977	236127	125356	110771	235630	125121	110509	238493	125647	112846
87	小計	1087276	1171600	636696	535792	1185179	1240936	658792	582144	1241884	657643	584239	1244835	656873	587962	1254758	657731	595027
88	以上計	26049806	25820530	13864300	12088287	26046081	25060162	13201393	11769934	24863032	13020066	11843955	25442322	13344518	12096804	25576542	13359691	12163750
89	蝦夷地	15615	21807	12466	9341	22631	26310	13559	12751	27409	14454	12955	28711	15002	13709	45417	23383	22034
90	以上計	26065421	25842337	13876766	12097628	26068712	25086472	13214952	11782685	24891441	13034520	11856910	25471033	13359520	12110513	25621959	13383074	12185784
91	史料値	26065425	25917830	13818654	12099176	26070712	25086466	13230656	11855810	24891441	13034521	11856920	25471033	13360520	12110513	25621957	13427249	12194708
92	不一致	+4	+75493			+2000	-6			0		0	0		-2			

資料：④＝関山直太郎『近世日本の人口構造』吉川弘文館、1958年、pp.137-139。⑤＝高橋梵仙『日本人口史之研究』日本学術振興会、1971年、pp.107-149。⑥＝南和男『幕末江戸社会の研究』吉川弘文館、1978年、pp.166-178。⑦＝南和男『寛政四年の諸国人口について』日本歴史、432号、1984年、pp.42-47。⑧＝『日本全国戸籍表』速水 融監修『国勢調査以前日本人統計集成1』原書房、1992年、所収。

補注

原資料は、古代に定められた、畿内・六道の順に従い記録されているが、この表では、筆者の考えに従い、東北日本から西南日本の方向に記した。アンダーラインのある欄は、筆者による地域区分を示している。

06 は東奥羽、09 は北奥羽、19 は南関東、27 は北陸、31 は東山、38 は東海、44 は近畿、53 は近畿周辺、61 は山陽、69 は山陽、74 は四国、82 は北九州、87 は南九州、89 は北海道である。いうまでもなく、このような地域分類は、原資料にはない。また、各年の人口の合計と男女別人口は一致しない場合が少なからず見られる。これについては、確かなる術を持たないので、そのまま掲げてあるが、その差が異常に大きい場合には、合計欄の前に？を付した。その他、問題と思われる点は、以下に記した。

①②③ 下段のこの3年度の数値は非連続的で、文政5年と天保5年の数値が低過ぎる。しかし、補正すべき数値の根拠はない。

④⑤ 関山氏の「国別人口表」の数値をそのまま掲載したが、加賀と能登の数値が入れ替わっている可能性が高い。

⑥ この数値はどうみても高すぎる。恐らく 291499 なのだろう。

⑦⑧ この両年度の数字は低過ぎる。明治13年の統計で約2万人を数えた伊豆七島の人口が含まれていなかったのではなかろうか。

⑨⑩ 上記同様、伊豆七島の人口が含まれていなかったのではなかろうか。

⑪ この数値は過大である。関山氏のデータの全国合計値と、実際の合計値との間にある差、約7万人は、駿河の人口が過大に記載されているからかも知れない。

⑫ 前後の年の数値から、この年の三河の人口は過小に記録されていると考えられる。

⑬ 三河同様、この年の美作の人口は過小に記録されていると考えられる。

⑭ 三河・美作同様、この年の対馬の人口は過小に記録されていると考えられる。

⑮ 三河・美作同様、この年の対馬の人口は過小に記録されていると考えられる。

国 名	文政 5年(1822)㉑			文政11年(1828)㉑			天保 5年(1834)㉑			天保11年(1840)㉑			弘化 3年(1846)㉑			明治 5年(1872)㉑		
	合 計㉑	男 子	女 子	合 計㉑	男 子	女 子	合 計㉑	男 子	女 子	合 計 計	男 子	女 子	合 計	男 子	女 子	合 計㉑	男 子㉑	女 子㉑
06 陸奥	1650629	865599	785030	1680102	880806	799296	1690509	886029	804480	1506193	778867	727326	1607881	830090	773791	2294915㉑	1180269	1114646
09 出羽	909212	483341	425871	945919	500773	445146	940929	491406	449523	832649	433227	399422	912452	475714	436738	1191020㉑	613563	577457
10 上野	456950	241385	215565	464226	247765	216461	451830	236087	215743	426073	221417	224656	428092	220975	207117	507235	256025	251210
11 下野	395045	213472	181577	375957	198056	177901	342260	179155	163105	367654	190110	177544	378665	195124	183541	498520㉑	251634	246886
12 常陸	495575	260800	234775	495859	259649	236210	457321	238709	218612	499761	258358	241403	521777	269082	252695	648674㉑	329077	319597
13 小計	1347570	715657	631917	1336042	705470	630572	1251411	653951	597460	1293488	669885	643603	1328534	685181	643353	1654429	836736	817693
14 武蔵	1694255	907216	787039	1717455	912028	805427	1714054	907101	806953	1721359	903167	818192	1777371	927444	849927	1943211	976490	966772
15 相模	269839	141195	128644	289376	151202	138174	294009	153766	140243	285196	148199	136997	303271	157684	145587	356638	182666	173972
16 上総	372347	190506	181841	362411	185535	176876	364240	185501	178739	358714	182735	175799	360761	184361	176399	419969㉑	214695	205274
17 下総	419106㉑	217838	201268	497758㉑	257594	240164	402093㉑	207830	194263	499507	256068	243439	525041	268252	256789	645029㉑	326569	318460
18 安房	139662	70977	66885	140830	71463	69370	144581	73320	71261	139442	70612	68830	143500	72776	70724	154683	77301	77382
19 小計	2895209	1527732	1367477	3007830	1577822	1430011	2918977	1527518	1391459	3004218	1560781	1443437	3109944	1610517	1499426	3519530	1777721	1741809
20 佐渡	101872	51765	50107	103269	52804	50765	103132	52279	50853	102701	51778	50923	102265	51231	51034	103098	51217	51881
21 越後	1154052	592757	561295	1191935	610670	581265	1224947	620607	604340	1099980	557701	542279	1172973	592037	580936	1368428	682946	685432
22 越前	383265	197487	185778	413888	222688	191200	402411	206085	196326	383583	195486	188107	403121	205178	197943	615663㉑	315927	299736
23 能登	193569	98299	95270	198111	99546	98666	197704	98816	98888	197941	98114	90317	186970	92817	94153	262486㉑	131310	131176
24 加賀	220004	112915	107089	220267	112739	107528	230461	118070	112391	223338	113776	109562	238291	122468	115823	403357㉑	202093	201264
25 越中	375572	194665	180907	386071	199362	186709	397823	203879	197848	382817	167848	160369	353674	179994	173680	461032㉑	230262	230770
26 若狭	83056	41872	41184	84678	42591	42087	84366	42494	41872	83956	42497	41459	77183	38367	38816	85487	42600	42887
27 小計	2511390	1289760	1221630	2598219	1340400	1258220	2640844	1342320	1298614	2601206	1218200	1183016	2534477	1282092	1252385	3299551	1656405	1643146
28 甲斐	291765㉑	148500	143075	391499㉑	197062	194437	318474	160667	157807	300152	150449	149703	310273	156689	153584	360068	179630	180438
29 信濃	778025	400284	377741	797079	409026	388073	808073	413009	395064	775313	394066	381247	794698	403868	390830	919115㉑	464124	454991
30 飛騨	89818	46777	43041	91382	47528	43854	93765	48760	45005	82967	42992	39975	86338	44512	41826	98378	50975	47583
31 小計	1159518	595561	563857	1279960	653616	626364	1220312	622436	597876	1158432	587507	570925	1191309	605069	586240	1377564	694549	683012
32 伊豆	134722	68471	66253	130796	69354	67442	144595	74213	70382	110523㉑	56450	54073	115197	59001	56196	149749㉑	75345	74404
33 駿河	288824	150602	138222	270763	143544	134219	253848	131403	122445	274705	140735	133970	286290	146854	139436	368505㉑	186830	181675
34 遠江	386581	196979	189602	361236	184000	177236	360818	183150	177668	350967	177870	173090	363959	184703	179256	414928	209941	204987
35 三河	437019	217422	219597	439635	218510	221115	440264	219314	220950	421432	209435	211997	431800	214730	217070	482931	239235	243696
36 尾張	631809	318803	313006	646555	327027	319528	643977	326305	317672	622539	315187	307352	653678	328353	325335	727437	361025	366412
37 美濃	598580	308732	289848	609459	314458	295001	607269	312793	294476	570807	292489	278318	583137	299262	283875	660896	335389	325507
38 小計	2477535	1261009	1216528	2458444	1256893	1214541	2450771	1247178	1203593	2350973	1192166	1158800	2434061	1232903	1201168	2804446	1407765	1396681
39 山城	478652	249319	229333	498296	250500	247096	488726	251522	237204	445432	216214	219218	452140	229280	222860	429930	212814	216216
40 大和	346319	177604	168715	356627	182873	173754	360071	184694	175377	338571	171777	166794	361157	183325	177862	418326	210185	208141
41 河内	244816	124703	120113	223747	113010	107377	224822	113420	111420	211559	105761	105798	224055	112660	111395	237678	118805	118873
42 和歌山	205545	104440	101105	208884	106073	102811	207211	104938	102273	189786	95522	94264	197656	99279	98377	209174	103781	105393
43 摂津	790635	417032	382603	812090	421309	390791	796439	411938	385073	749953	386170	363783	763729	389864	373864	729444	363974	365470
44 小計	2065967	1073098	1001869	2099644	1073765	1025189	2077269	1066494	1011347	1935301	975444	949857	1998737	1014408	984358	2023652	1009559	1014093
45 近江	557491	285027	272466	547724	278025	269699	511948	278984	232964	527412	265702	261710	541732	272934	268798	576564	286181	290383
46 伊賀	85636	43622	42014	87949	44696	43253	89243	45370	43873	88616	45030	43586	87174	46728	45046	97164	48968	48196
47 伊勢	494640	248985	245652	498171	250407	247764	499958	253920	248566	480032	240599	239433	499874	250895	248979	585988	292109	293879
48 志摩	40401	19824	20577	40919	20095	20824	41888	20542	21346	39210	19074	20136	40693	19836	20857	37439	18122	19317
49 紀伊	508112	267916	240196	516478	267072	249406	520902	269129	251773	489036	250029	239007	499826	256751	243075	613925㉑	310284	303641
50 淡路	119327	62028	57299	123748	64328	59420	123500	64036	59464	119147	62075	57072	122773	63641	59132	164939㉑	84439	80500
51 徳島	609246	314784	290460	613534	320794	292740	600731	314174	286557	581713	301723	279990	594560	307518	287042	635791	324338	311453
52 丹波	290243	150694	139549	291869	151002	140967	292808	151230	141578	276117	141524	134593	280947	143891	137056	295359	150247	145112
53 小計	2705096	1396882	1308213	2720392	1396419	1324073	2680978	1394857	1286121	2601283	1325756	1275527	2672179	1362194	1309985	3007169	1514688	1492481
54 丹波	154763	78793	75970	157401	79956	77445	159211	80868	78343	149063	75183	73880	154308	78201	76107	160932	80585	80347
55 但馬	179408	93876	85533	181052	94438	86614	184323	95881	88442	162243	83059	79184	173573	89081	84492	195084	95004	91182
56 因幡	132670	70183	62487	135969	71740	64299	136204	71348	64856	120879	62353	59526	127797	65914	61883	162842㉑	83201	79641
57 伯耆	180730	95977	84733	186813	98684	88119	191175	100518	90657	168310	86793	81517	177420	91742	85678	194158	99765	94393
58 隠岐	24437	12219	12218	25234	12600	12634	25712	12840	12872	25772	12922	12850	26208	13261	12947	28531	14442	14089

59	出雲	299708	157728	141980	308346	162387	145959	315270	160593	149677	302837	157156	145681	309606	161179	148727	340042	175381	164661
60	石見	257508	134917	121917	257349	136110	121239	264948	140086	124862	225657	116302	109355	239963	122878	114085	259611	133168	126443
61	小計	1229224	643713	584838	1252164	655915	596309	1276843	662134	609709	1154761	593768	561993	1208875	622256	583919	1333202	682446	650756
62	美作	159007	87016	71991	159850	86910	72940	164018	88586	75432	156196	83010	73186	165468	87690	77778	215602	112439	103163
63	備前	318203	171933	146270	318771	171845	146926	318647	171184	147463	304229	162697	141532	310576	165738	144838	331878	174482	157396
64	備中	337155	180043	157112	343792	182970	160822	347415	184735	162680	335494	176783	158711	346927	183031	163896	396880	206267	190613
65	備後	342184	177374	164810	351597	181854	169743	360659	186924	173732	344919	177401	167518	360832	185285	175547	456461	231770	224691
66	安芸	547296	285648	261648	564271	294329	269942	578516	301475	277041	527849	273665	254184	553708	286422	267286	667717	341480	326237
67	周防	397836	208244	189592	429329	226639	206691	436198	226672	209526	413630	214215	199415	435188	227300	207888	497034	255033	242001
68	長門	250063	131568	118495	257607	135640	121967	259171	136508	122663	251779	132347	119432	261100	137291	123809	330502	169631	160871
69	小計	2351744	1241826	1109918	2425217	1276187	1149031	2464624	1296084	1168537	2334096	1220118	1113978	2433799	1272757	1161042	2896074	1491102	1404972
70	阿波	446291	230555	215736	454120	233821	220289	459244	235998	223246	431050	220544	210506	448287	229444	218843	586046	296700	289346
71	讃岐	409815	217460	192355	422508	223599	198909	432648	227256	205392	419969	218913	201056	433880	228494	205386	559712	286917	272795
72	伊予	563669	297541	266128	574847	302476	272371	585651	306754	278897	580589	302597	277992	599948	312844	287104	775974	398813	377161
73	土佐	443478	240261	203217	445473	240900	204573	455306	245621	209685	451871	243919	207952	461031	248586	212445	524511	279629	244882
74	小計	1863253	985817	877436	1896948	1000796	896142	1932849	1015629	917220	1883479	985973	897506	1943146	1019368	923778	2446243	1262059	1184184
75	筑前	321857	170952	150905	329886	173644	156242	335803	175868	159935	339434	175896	163538	346942	177978	168964	441175	224238	216937
76	筑後	284169	164806	119363	292913	168568	124345	307206	175574	131632	295678	169386	126292	299041	170367	128674	391535	199924	191611
77	肥前	683536	359080	324455	701527	364690	336837	699154	361249	337905	692334	356811	335523	713593	366982	346611	1074460	545662	528798
78	肥後	26532	10129	12405	27624	14705	12919	27215	14468	12747	27210	14439	12771	27005	14277	12728	330100	17142	15868
79	対馬	16963	8785	8178	14478	7585	6893	16713	8626	8087	16553	8446	8107	16904	8648	8256	29684	15270	14414
80	豊前	239269	127759	111510	243949	129094	114854	247176	130454	116722	240798	126338	114460	249274	129404	119870	304574	154845	149729
81	豊後	474016	247257	226759	474540	247169	227357	475985	246856	229129	457229	235573	221656	470875	242381	228494	562318	285392	276926
82	小計	2046342	1088768	953575	2084917	1105455	979447	2109252	1113095	996157	2069236	1086889	982347	2123634	1110037	1013597	2836756	1442473	1394283
83	肥後	720216	370407	349809	738078	378197	359881	743544	379617	363927	741677	378514	363063	755781	384396	371385	953037	476211	476826
84	日向	241310	130162	111148	243412	130858	112554	245476	130812	114664	249955	132811	117144	247621	131608	116013	376527	194379	182148
85	大隅	107603	57882	49721	104218	55901	48318	103096	55383	47713	97228	59923	45305	99212	53170	46042	256816	133626	123190
86	薩摩	250831	131199	119632	251649	130752	120897	248364	129264	119100	239891	124304	115587	241797	125553	116244	549440	276483	272957
87	小計	1319960	689650	630310	1337357	695708	641650	1340480	695076	645404	1328751	695552	641099	1344411	694727	649684	2135820	1080699	1055121
88	以上計	26532649	13858413	12678469	27123155	14120025	13015991	26996048	14014117	12977500	25854066	13324133	12548836	26843439	13817313	13019464	32820368	16650034	16170334
89	蝦夷地	61948	? 15002	? 13709	65022	33902	31121	67862	34910	32952	64346	33261	31085	70887	36739	34148	123668	63031	60637
90	以上計	26594597	13873415	12692178	27188177	14153927	13047112	27063910	14049027	13010452	25918412	13357394	12579921	26914326	13854052	13053612	32944036	16713065	16230971
91	史料値	26602110	13894436	12707674	27201400	14160736	13040064	27063907	14053450	13010457	25918412	13359384	12559028	26907625	13854043	13053582	32944036	16713065	16230971
92	不一致	7513			-13223			-3			0			-6701			0		

補注

① 弘化3年の数値と比べて20%以上多い国で、当時の人口増加率から考えて、江戸時代の数値が過小であったことが、ほぼ確実な国。これらの国を領地とする金沢藩、和歌山藩、徳島藩、広島藩、福岡藩、対馬藩、鹿児島藩は明らかに、人口調査、もしくはその結果の幕府への報告が、実際の人口より過小であった。こういう過小報告が、奥羽、北陸、山陽、四国、九州に多く見られることに注意する必要がある。

② 原資料には、琉球を含めて、33110825人と記されている。

③ 明治5年の資料では、旧陸奥が、陸奥、陸中、陸前、岩代、磐城の5国に、旧出羽が、羽前、羽後の2国に分割されている。また、旧蝦夷地は、石狩、後志、摩羅、渡島、日高、十勝、釧路、根室、千島、北見、天塩、樺太に分割されている。

註

(1) 茨城県立歴史館『茨城県関係古代金石文資料集成』一九八五年、一二五頁。この情報は、同館の佐藤正好氏のご好意による。

(2) 『大日本近世史料 肥後国人畜改帳』全五巻、東京大学出版会、一九五五年。

(3) 速水 融「近世初期の家数人数改と検地について」『経済学年報(慶應義塾経済学会)』一、一九五八年、一―五九頁。

(4) 初見の宗門改帳は、寛永一五年の美濃国安八郡楡保村のものがある。『岐阜県史 史料編 近世九』一九七三年、五〇四―五一〇所収。原本は、岐阜県歴史資料館寄託の棚橋家文書。

(5) 関山直太郎『近世日本の人口構造』吉川弘文館、一九五八年、一三七―一三九頁所収の「国別人口表」、南和男「寛政四年の諸国人口について」『日本歴史』四三二号、一九八四年、四二―四七頁所収の寛政四年(二七九二)人口、同「幕末江戸社会の研究」吉川弘文館、一九七八年、一六六―一七八頁所収の天保一一年(一八四〇)人口をまとめたものである。

(6) 例えば、新見吉治『壬申戸籍成立に関する研究』日本学術振興会、一九五九年。

(7) 筆者もかつて「宗門改帳から壬申戸籍へ」三田学会雑誌(一一)、(一二)、四七巻一二号および四八巻九号、一九五四・五五年、においてそのように考えたが、これは訂正しなければならぬ。また、最近では、『国史大辞典』の「宗門人別改

帳」の項目に、この二つの資料の連続的性格を示唆するような表現がある。『国史大辞典』第七巻、吉川弘文館、一九八六年、三一―三一二頁。なお、記載については、新見吉治前掲書、一一―一三頁に、周防国佐波郡三田尻宰判下仁井令晒石の事例が掲載されている。

(8) 石川卓美『防長歴史用語辞典』マツノ書店、一九八六年、一五四―一五五頁。なお、長州藩の戸籍関係文献については、徳山大学経済学部、友部謙一氏の教示によるところが大きい。

(9) 同書、「戸籍帳」の箇所。一五四頁所収。

(10) 同書、同頁。

(11) 『山口県史料 近世編 法制下』山口県文書館、一九七七年、五五九頁所収の文政八年十一月、当職毛利内匠より赤川九郎左衛門宛文書「覚」より。

(12) 『国史大辞典』所収の「村田清風」の項目、同書第一三巻、吉川弘文館、一九九二年、六八一頁。石川卓美『山口県近世史研究要覧』マツノ書店、一九七六年、二二二頁。

(13) 「某氏意見書」滝本誠一編『日本経済大典 第四七巻』一九三〇年、一四二頁。

(14) 京都町触研究会編『京都町触集成 第一三巻』岩波書店、一九八七年、二六五―二六六頁。

(15) 石井良助『家と戸籍の歴史』創文社、一九八一年、三〇二―三〇三頁に書式雛形が掲載されている。

(16) 原資料は、国立史料館所蔵、武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書。なお、ここに掲げた例は多摩郡石田村の明治三年戸籍で、この家族は、新選組副長、土方歳三の生家である。歳

- 三の死は、この戸籍編成の前年のことであった。
- (17) 新見吉治、前掲書は最も包括的な研究である。
- (18) 内閣統計局編『明治五年以降我国の人口』東京統計協会、一九三〇年。
- (19) この統計を含め、国勢調査以前の人口統計については、『国勢調査以前日本人口統計集成』原書房、一九九二年、として目下刊行中である。
- (20) この資料を利用した研究事例として、速水融「明治前期統計にみる有配偶率と平均結婚年齢——もうひとつのフォッサ・マグナ——」三田学会雑誌、七九卷三号、一九八六年、一—一三頁。Griffith Feeney and Hamano Kiyoshi, "Rice Price Fluctuations and Fertility in Late Tokugawa Japan," *Journal of Japanese Studies*, Vol. 16, No. 1, 1990, pp. 1-30. 黒須里美「弘化三年ヒノエウマ」日本研究(国際日本文化研究センター紀要) 第六集、一九九二年、三五—五五頁。
- (21) 森田優三『人口増加の分析』日本評論社、一九四四年、三七二頁。
- (22) 古くは、世良太一編『杉先生講演集 全』一九〇二年、から、最近の出版としては、日本統計協会創立百周年記念事業計画委員会復刻企画『珍智知復刻版 別冊』日本統計協会、一九八〇年、に解題、杉先生小伝、著作目録、研究文献目録、略年譜を書かれた、細谷新治氏の業績に至るまでいくつかある。さらに、最近、杉の業績が再評価され、墓碑等の建設も行われた。(三瀧信邦「杉 亨二の墓所に記念碑」統計、四三巻五号、一九九二年、七八—八〇頁。)
- (23) 前掲『杉先生講演集 全』の末尾に掲載されている。
- (24) 『甲斐国現在人別調』は、復刻版が出版されている。芳文閣、一九六八年。なお、村に残された調査個表を用いた研究として、斎藤 修「明治初期農家世帯の就業構造——山梨県下四カ村『人別調』の分析——」(一)、三田学会雑誌 七八卷一号、一九八五年、一四—三三頁、同(二)、三田学会雑誌 七八卷二号、一九八五年、一〇九—一二二頁がある。
- (25) 前掲『杉先生講演集 全』五二頁。
- (26) 花房は、岡山藩士の家に生まれ、明治前期に活躍した外交官、花房義質を兄に持ち、自らも国際的感覚を備えた官僚であり、初代の統計局長であったが、その地位にあること二〇年の長きに及んだ。人口統計に関し、花房の考え方を語る資料として、「人口統計調査方法変更二関スル審査報告書」(総理府統計局編『総理府統計局百年史資料集成 第二巻 人口 上』総理府統計局、一九七六年、二一八—二二五頁所収)がある。
- (27) マイクロフィルム版には、共武政表および徴発物件一覧表のすべてが撮影されている(洞 富雄監修『共武政表・徴発物件一覧表』雄松堂フィルム出版、一九八九年)。冊子体復刻本は、『明治八年 共武政表』青史社、一九八〇年、『共武政表(明治二年) 上・下』柳原書店、一九七八年、『徴発物件一覧表 明治一六年 上・下』柳原書店、一九七九年、『徴発物件一覧表 明治二十年』柳原書店、一九七九年、がある。

代表者、速水 融）における報告 および、現在刊行中の『国勢調査以前日本人口統計集成』原書房、一九九二年の解題を基に起稿したものである。共同研究参加者からのコメントに感謝したい。

(28) 松田武監修『明治期衛生局年報』原書房、一九九一年。
(29) これを利用して職業別人口統計を作成した結果が、梅村又次他編『労働力 長期経済統計 第一巻』東洋経済新報社、一九八八年、第8表「男女・産業別内地人有業者数（年央現在）一九〇六～一九二〇年」である。（同書、二〇四～二〇七頁所収）

(30) 大久保利兼監修『明治大正日本国勢沿革資料総覧』全六巻、柏書房、一九八三～一九八五。

(31) 前掲『移智契複製版 別冊』杉先生小伝（細谷新治著）八二頁。

(32) この作業は、国際日本文化研究センター、情報管理施設情報課、吉崎幸二氏の協力によった。

(33) 速水 融「明治前期統計にみる有配偶率と平均結婚年齢——もう一つのフォッサ・マグナ」三田学会雑誌、七九巻三号、一九八六年、一～一三頁。

(34) 本籍人口をベースにした研究事例として、高橋真一「明治期日本の出生力について——本籍人口と生命表の生残率による推計——」国民経済雑誌 一四八巻五号、一九八三年、二二～三九頁。同「本籍人口を利用した明治期人口推計の試み」国民経済雑誌 一六三巻五号、一九九一年、三九～五八頁、がある。

(35)・(36) 注(5)参照。

〔補記〕本稿は、一九九二年一月、国際日本文化研究センター共同研究「近代化過程における人口と家族」（研究